平成 25 年度筑波大学附属図書館特別展

筑波大学附属図書館
University of Tsukuba Library

平成25年度　筑波大学附属図書館特別展

知の開拓者（パイオニア）たち

筑波大学開学　40＋101周年記念特別展

会期　平成25年10月21日（月）～11月22日（金）

会場　筑波大学附属図書館（中央図書館貴重書展示室）

主催　筑波大学附属図書館

ご挨拶

筑波大学は、本年、開学四〇周年を迎えました。その前身校の歴史は、さらに一四一年前の師範学校の開校にさかのぼります。附属図書館では、これを記念して、「知の開拓者（パイオニア）たち―筑波大学開学40＋101周年記念特別展―」を開催いたします。

筑波大学附属図書館は、前身である東京教育大学附属図書館の蔵書を引き継ぎ、一九七三年に設置されました。現在は、中央図書館、体育・芸術図書館、医学図書館、図書館情報学図書館、大塚図書館（東京）からなり、和洋書約二百五十万冊、和洋雑誌約二千二百種、電子書籍約一万九千点、電子ジャーナル約二万三千種、さらに機関リポジトリであるつくばリポジトリにより約二万九千件のコンテンツを提供しております。また、ネットワークを介した図書館利用のための電子図書館システムの提供、各種の学習機能を提供するラーニングスクエアの設置、図書館職員に加え、図書館ボランティア、ラーニングアドバイザーを配置するなど、様々な利用者の要求に対応しております。

筑波大学は開かれた大学をその基本的性格としておりますが、附属図書館においても、学生はもちろん学外の多くの方々にご利用いただけるよう様々な取り組みを行っております。特別展はその一つであり、これまでも学内組織の協力を得つつ、本学が所蔵する貴重書、和装本、古地図などを広く公開してきました。昨年度は、「明治時代に礼法はいかにして伝えられたか―出版メディアを中心に―」と題して、礼法教育に用いられた各種資料を展示し、好評を博しました。

開学四〇周年を記念して行われる今回は、研究開発室・人文社会系の山澤学先生のご指導のもとに、東京教育大学以前の前身校に焦点をあて、図書館に深い関わりを持つ三宅米吉、松井簡治、諸橋轍次、能勢朝次先生を中心に、近代日本における学問の最先端にあった前身校教員の業績の一端を、附属図書館所蔵の資料とともに紹介しております。また、あわせてそのような知の開拓者たちを支援してきた大学附属図書館の果たすべき役割についても再確認する内容となっております。

附属図書館特別展は、本学に蓄積された豊かな「知」を積極的に内外に向けて発信する、という附属図書館の取り組みの一つです。是非とも多くの方々にご高覧いただければ幸いです。

平成二五年一〇月

附属図書館長　中山　伸一

目次

ご挨拶 …… 2
凡例 …… 4
プロローグ　我ら知の開拓者 …… 5
Ⅰ　醒めて立て　知の開拓へ ―前身校事始― …… 6
Ⅱ　人も知る　茗渓の水 ―知の開拓最前線― …… 13
Ⅲ　いと高き　知の殿堂 ―附属図書館の黎明― …… 23
開拓者よもやま話
第一講　校章「桐の葉」の誕生 ―国民と天皇のあいだ― …… 9
第二講　茗渓に咲いた会津の志 ―教育の総本山― …… 12
第三講　昇格か、廃校か ―東京文理科大学の成立― …… 17
第四講　自治よ自由 ―校歌と戦時体制― …… 20
第五講　三宅米吉と歴史教科書 ―明治四四年南北朝正閏問題― …… 26
第六講　守り継がれる前身校の知 ―被災図書物語― …… 31
資料編
筑波大学附属図書館の歩み …… 32
歴代図書館長一覧 …… 33
附属図書館特別展・企画展一覧 …… 34
附属図書館所蔵 文庫・コレクション一覧 …… 35
筑波大学附属図書館研究開発室について …… 38
掲載資料一覧 …… 39

凡例

一、本書は平成二五年度筑波大学附属図書館特別展「知の開拓者（パイオニア）たち―筑波大学開学40＋101周年記念特別展―」（会期 平成25年10月21日（月）～11月22日（金））の図録である。同特別展は筑波大学開学40＋101周年記念事業として開催される。

一、本図録に掲載される資料は、参考資料の一部を除き、筑波大学附属図書館が所蔵する。

一、図録中の資料番号は、展示会場での陳列番号と一致するが、陳列の順序とは必ずしも一致しない。また、一部の展示資料については、本図録への掲載を割愛する。

一、書誌情報や解説等の漢字表記は、原則として通行の字体に改める。

一、資料解説では、歴史的人物名の敬称を省略する。また、高等師範学校を高師、東京高等師範学校を東京高師、東京文理科大学を文理科大、東京教育大学を教育大と略記する。

一、本編・資料解説（五～三一頁）は山澤 学、資料編（三二～三八頁）は篠塚富士男、大曽根美奈、山本淳一が執筆し、表紙のデザインは西島悠策が担当した。これらの編集および校正は本展ワーキンググループの全職員があたった。

プロローグ　我ら 知の開拓者

国立大学法人筑波大学は、本年一〇月一日に開学四〇周年を迎えた。昭和四八（一九七三）年の開学以来、常に「知の開拓者」として歩んできた。

附属図書館もまた、開学時に設置された。昭和四二（一九六七）年の報告「新総合大学における新大学図書館の構想」を皮切りに、新構想の検討が重ねられ、同五二（一九七七）年一一月に「筑波大学図書館システムの構想」が、また、翌々五四（一九七九）年一月には基本方針である「筑波大学図書館システム実施計画案」が策定された。それらは学術情報の中枢的拠点となる「開かれた大学図書館」、個々の学問分野および学際的・総合的・比較論的分野の双方に資する「使いやすい図書館」、蔵書の「集中管理」と全面開架、附属図書館全体の管理運営・サービス計画の具現化を目指すもので、「知の開拓者」の支援がミッションとなった。

そして、昭和五四年一〇月に中央図書館の供用が開始された。これに先立ち四九（一九七四）年七月に体育・芸術図書館、五三（一九七八）年一月に医学図書館が開館した。また、平成元（一九八九）年六月に東京キャンパスの大塚図書館、一四（二〇〇二）年一〇月に旧図書館情報大学附属図書館を改組した図書館情報学図書館が開館した。

平成七（一九九五）年には中央図書館新館が開館し、常設展・特別展・企画展による貴重書展示室からの発信が開始された。また、設置以来、情報学の活用にも積極的で、平成一〇（一九九八）年には電子図書館が構築された。さらに同一七（二〇〇五）年には研究開発室が設置され、図書館システムのさらなる充実が計られてきた。附属図書館もまた、常に「知の開拓者」の支援に向け、進化してきたのである。

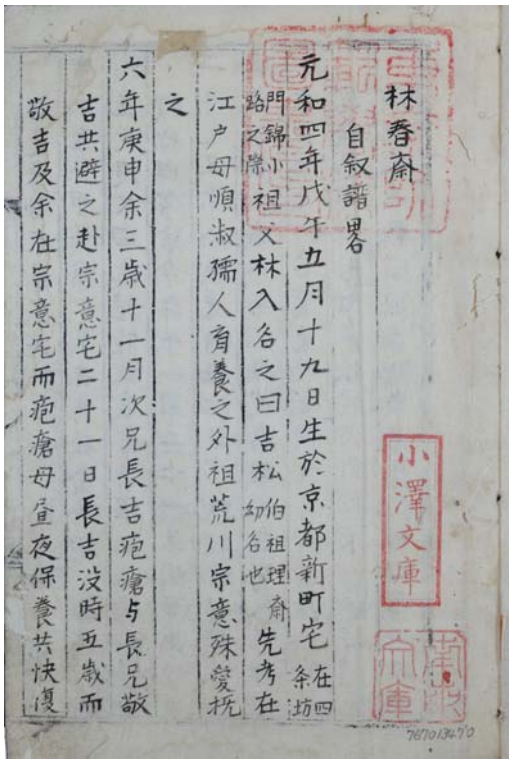
1　蒙古襲来絵巻　　**江戸時代後期**

宮内庁所蔵御物「蒙古襲来絵詞」（永仁元（1293）年ごろ、熊本藩士大矢野家旧蔵）の忠実な写本であるが、詞書はない。印記によれば但馬村岡（兵庫県）を領した交代寄合山名家の旧蔵で、東京文理科大学創立期に日本史・東洋史の資料として購入された。なお、文政年間（1818-30）ごろに絵師福田太華によって６組の模写が作成されたというが、本巻との関係は未詳。

Ⅰ　醒めて立て 知の開拓へ ―前身校事始―

筑波大学は、一四一年前にあたる明治五（一八七二）年、東京都文京区の湯島聖堂に隣接する昌平坂学問所（昌平黌）跡における師範学校の創設をもって創基とする。同校は翌年に東京師範学校と改称し、さらに、文部大臣森有礼の主導する同一九（一八八六）年の師範学校令によって中等教員の養成を目的とした高等師範学校へと発展した。その校地は、校長嘉納治五郎が活躍した明治三六（一九〇三）年に、大塚窪町の陸奥守山藩主松平家上屋敷跡へと移された（現 本学東京キャンパス）。

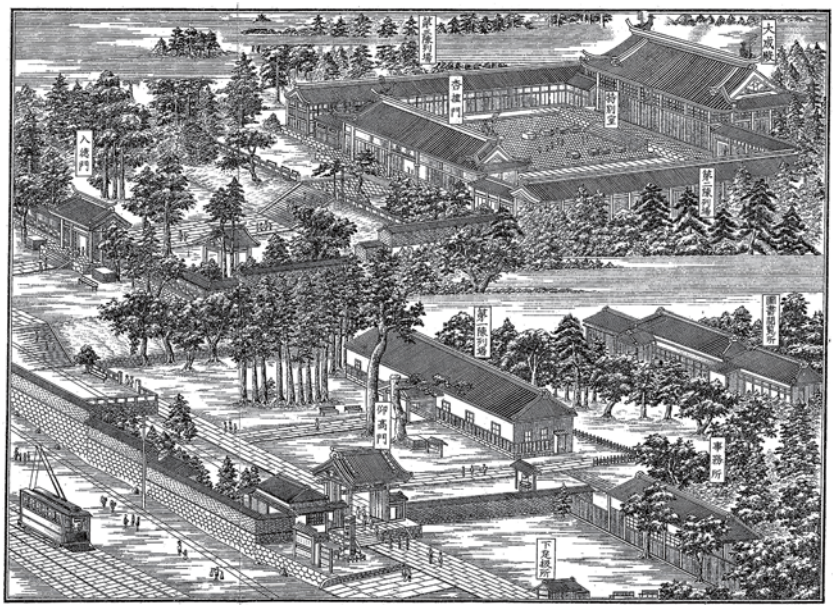
大正デモクラシー期には、教育が大衆化するなかで、高等師範学校の大学への昇格が課題となり、昭和四（一九二九）年の東京文理科大学の開学に結実する。同じころ、体育・農業教員、図書館職員の養成を担う諸学校、さらには不足する学校教員の補充を目的とする臨時教員養成所も、アジア・太平洋戦争期にかけて相次いで創設、拡充された。これらは、戦後に開学する東京教育大学および図書館短期大学・図書館情報大学、さらには本学の基礎となった。


林春斎
自叙譜略
元和四年戊午五月十九日生於京都新町宅在四条坊門錦小路之南祖父林入名之曰吉松伯祖理斎幼名也先考在江戸母順淑孺人育養之外祖荒川宗意殊愛抚之
六年庚申余三歳十一月次兄長吉疱瘡与長兄敬吉共避之赴宗意宅二十一日長吉没時五歳而敬吉及余在宗意宅而疱瘡母昼夜保養共快復
小澤文庫

2　林春斎自叙譜略　大田南畝

江戸時代後期

本書は湯島聖堂に縁のある朱子学者林家の２代鵞峰（春斎）の履歴書である。東京師範学校校長心得・校長補も務めた教諭小沢圭次郎（1842-1932）旧蔵の旗本大田南畝自筆の写本。本学の和漢書には、大田南畝をはじめとする幕臣の旧蔵書が相当数含まれる。



参考１　湯島聖堂敷地内の東京高等師範学校附属東京教育博物館

（『東京教育博物館一覧』明治 42（1909）年）

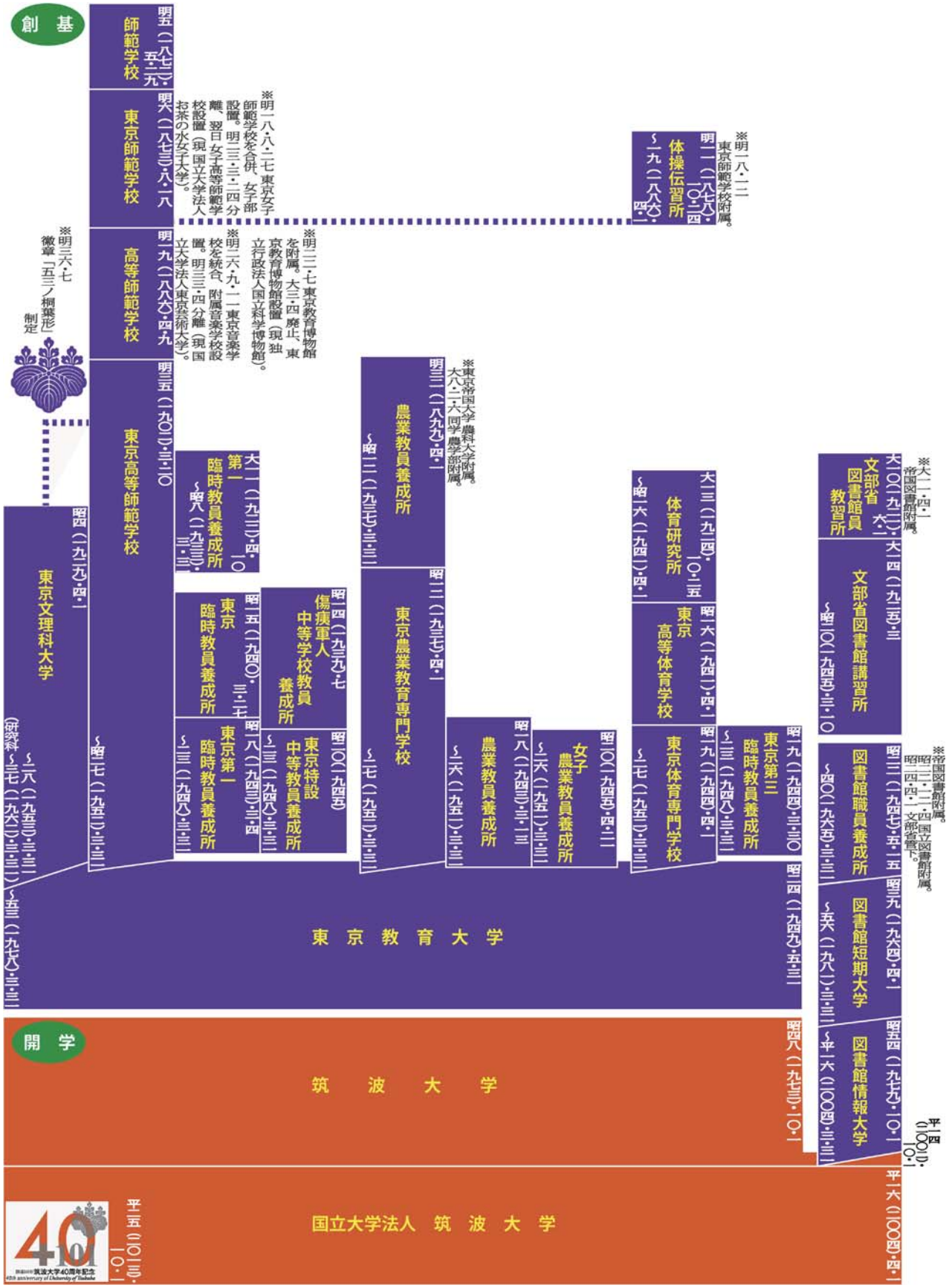


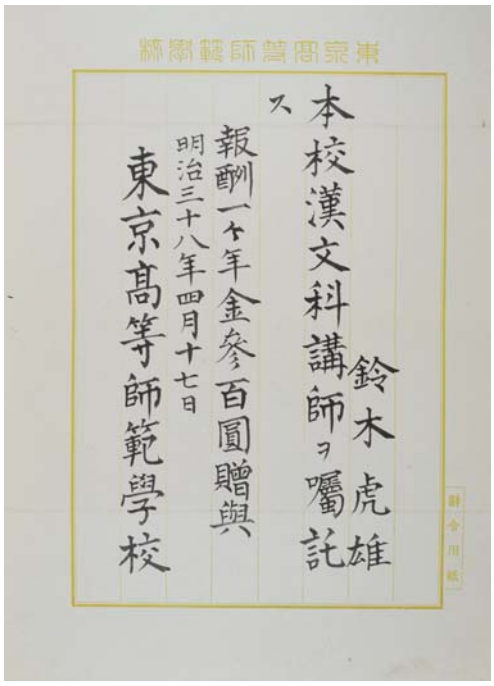
図１　国立大学法人筑波大学とその前身校の沿革概念図

創立・改組等の時期は学名・校名の右上に、また、閉学・閉校等の時期は左端に、「昭和 48（1973）年 10 月 1 日」を「昭四八（一九七三）・一〇・一」のように示した。

3　日本史要　木村正辞稿　那珂通高校訂

明治９（1876）年

明治 11（1878）年に東京師範学校から出版された小学校教科書の原稿で、師範学校罫紙を使用。那珂は折衷学派の儒学者・尊王論者で、元盛岡藩校作人館の句読師。維新後は大蔵省・文部省官吏となった。養子通世が高師教授であったためか、本学には作人館の印記をもつ和漢書も所蔵する。



4　東京高等師範学校辞令　明治 38（1905）年　〔鈴木虎雄文庫〕

明治の言論人陸羯南の娘婿としても知られる東京高師教授鈴木虎雄（1878-1963）は漢学者で、その関係資料が平成 22（2010）年に本学へ寄贈された。その中には漢文科講師着任時の辞令がある。鈴木は、日本における中国文学・文化研究（中国学）の創始者の一人で、多くの古典漢詩を紹介し、また自らも豹軒と号して漢詩を詠んだ。鈴木の関係資料は、後に高師から移った京都大学文学部にも所蔵される。

参考 2　東京キャンパスの旧守山藩邸内碑文

東京高等師範学校は明治 36（1903）年に湯島から大塚窪町の旧守山藩上屋敷跡に移転した。

右：**占春園の碑**　延享 3（1746）年造立　岡田兼山撰・宇留野震書（占春園内）

左：**木斛の碑**　文政 11（1829）年造立　水戸藩主徳川斉修撰・書（文京校舎前）

校章「桐の葉」の誕生―国民と天皇のあいだ―

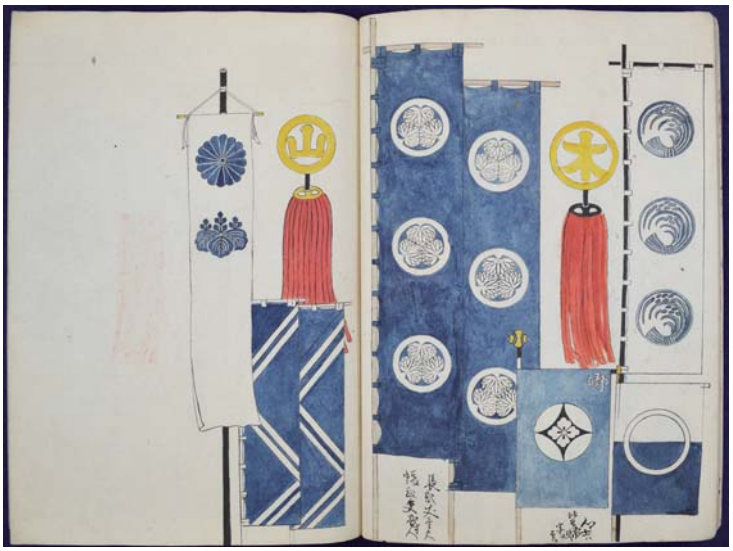
筑波大学の校章は「桐の葉」（五三の桐葉形）である。昭和四九（一九七四）年の本学第七一回評議会で「東京教育大学の伝統」を引き継ぎ、「桐の葉」とすることが決定され（『速報つくば』一九六）、平成一〇（一九九八）年の本学創立二五周年のさいに、芸術学系教授（当時）三田村畯右の考案した、筑波紫を基調とする現在の統一デザインに定められた。

「桐の葉」は、菊形、五七の桐葉形とともに、天皇・皇室ゆかりの紋章である。尊王家としても知られる水戸藩主徳川斉昭は、天保一一（一八四〇）年・同一五（一八四四）年に千束原（水戸市）で軍事教練として実施した追鳥狩（狩猟）における旗に用いている。

高等師範学校では当初、菊形が用いられ、五三の桐葉形は明治二一（一八八八）年一一月に附属学校（現附属小学校）の徽章とされた。菊形は同三三（一九〇〇）年九月六日に「金色磨」での「高師」の二文字に変更され、さらに同三六（一九〇三）年七月改正の「生徒服制」で「桐の葉」が採用された。同校を明治四一（一九〇八）年に卒業した東京文理科大学名誉教授諸橋轍次は、「教育尊重の意味にて宮内省より特別に允可、但宮中の五七の華を避けて三五の桐と致すとか聞き覚え居り」と述べていたという（東京教育大学学生部「桐葉」の由来」『桐葉』一二）。その「允可」（許可）は明治天皇の行幸のさいとも伝えられる。

東京師範学校・高等師範学校・東京高等師範学校・東京文理科大学には、明治天皇（明治七（一八七四）・一九（一八八六）年）・大正天皇（明治天皇名代、明治四四（一九一一）年創立四〇年記念式）・昭和天皇（昭和六（一九三一）年創立六〇年記念式）の行幸、英照・昭憲両皇太后（明治一九年）の行啓があった（『創立七〇年』）。行幸時には勅語があり、「健全ナル国民ノ養成ハ一ニ師表タルモノノ徳化ニ俟ツ、事ニ教育ニ従フモノ其レ奮励努力セヨ。」との昭和天皇の勅語は、行幸翌月に除幕され、東京キャンパス内、旧守山藩上屋敷の庭園である占春園前の奉安殿跡付近に残る「行幸記念碑」に刻まれている。

参考３　行幸記念碑

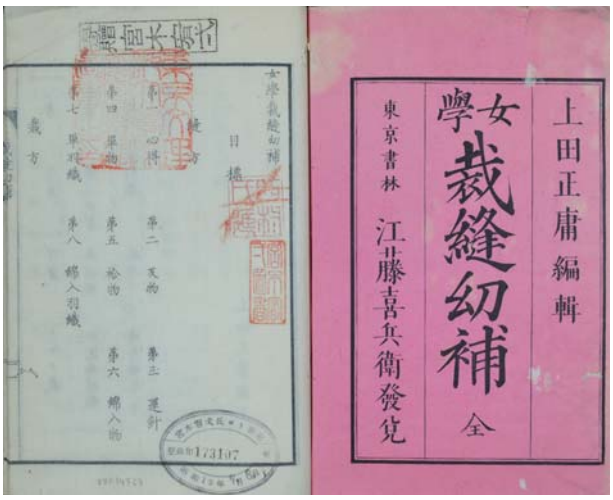


５　千束原追鳥狩記　江戸時代後期

7　歴世女装考　　岩瀬百樹（山東京山）撰

安政 2（1855）年刊

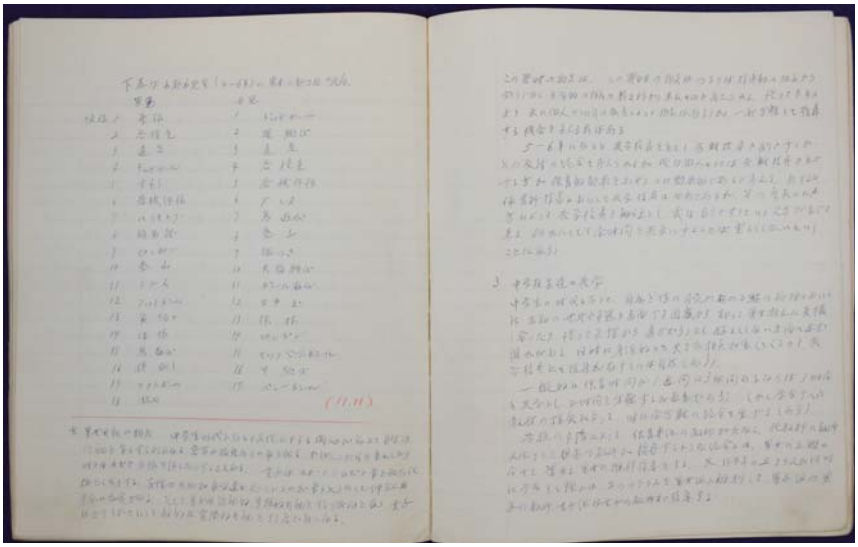
長く男子校であった東京高師の蔵書には家政学・女性学関係書籍も含まれる。本書は山東京山が女性の風俗を典籍・浮世絵などから集成した書。弘化 4（1847）年序。書名の「女装」とは、女性の装いのことであり、けっして女装した男性のことではない。



6　女学裁縫幼補　上田正庸編

明治 10（1877）年刊　　〔宮木文庫〕

女子用の裁縫教科書。宮木文庫は、文理科大教授乙竹岩造（1875-1953）の尽力により、東京・滝野川（北区）の寿徳寺住職宮木有弐が寄贈した寺子屋・学校の教科書コレクションで、同学に設けられた教育文庫の基礎となった。



9　*Administration and Management of Physical Education.*

野口源三郎　　（野口源三郎手稿コレクション）

東京高師・体育研究所で体育教育の運営・管理法を講じた野口源三郎（1888-1967）の講義ノート。「小都市児童（4—6 年）」の男女が好きなスポーツのランキングも見えるが、種目にハイキング、魚釣り、毬つき、大阪跳びなどが含まれるなど興味深い。

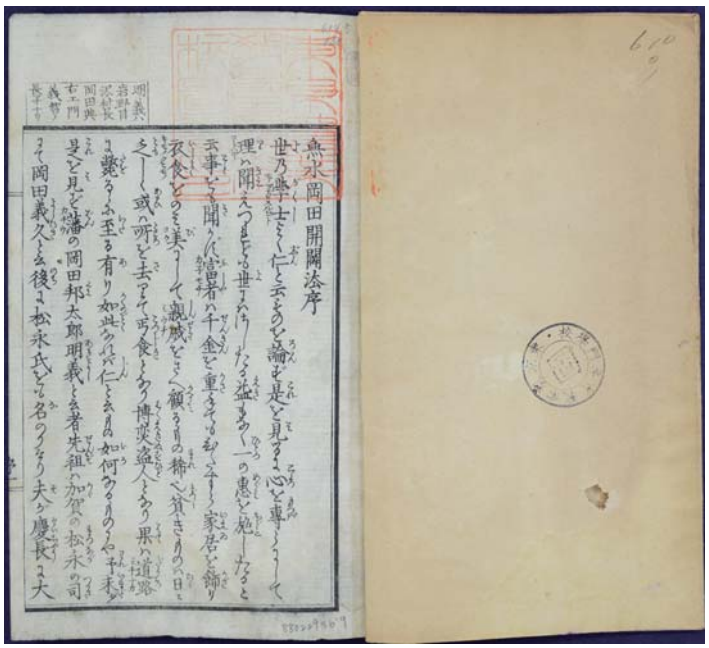
8　李蘭土氏講義 体育論

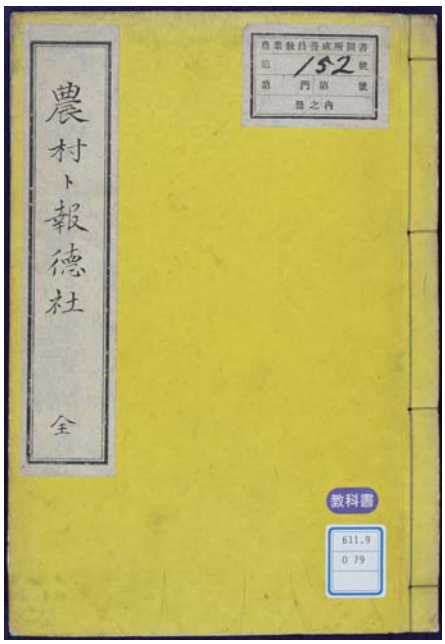
J.A. リーランド述

坪井玄道訳

明治 12-14（1879-81）年

体操伝習所旧蔵。体操は、近代日本の国民養成で重視された。ジョージ・アダムス・リーランド（1850-1924）は体操伝習所・東京師範学校における体操教育の基礎を作った御雇外国人。坪井玄道（1852-1922）はその講義を通訳した。





11　無水岡田開闢法　岡田明義

明治元（1868）年刊

出羽・岩野目沢村（秋田県由利本荘市）の老農岡田明義が救荒作物としての馬鈴薯（ジャガイモ）の効用と栽培法を説いた農書。東京農業教育専門学校旧蔵。同校では、後に教育大附属図書館長となる菌学者平塚直秀（1903-2000）も教授を務めている。『日本農書全集』第 18 巻に本学元教授佐藤常雄（1948-2006）の翻刻がある。

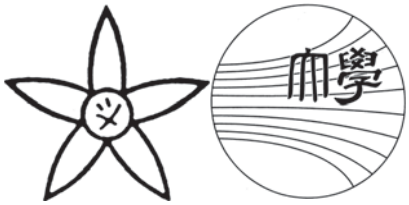
10　農村ト報徳社　大杉秀吉

大正 9（1920）年

〔10・11 は旧農学部教員養成関係資料〕

農業教員養成所旧蔵。著者は同所卒業生で、二宮尊徳の報徳思想により農村更正を指導した報徳社の役割を論じる。旧農学部教員養成関係資料には、東京高師教授稲垣乙丙（1863-1928）の『新編農業読本』『農学入門』も含まれる。

東京農業教育専門学校校章
（『駒場八十年の歩み』）



図書館短期大学校章（左）
図書館情報大学校章（右）
（『図書館情報大学同窓会橘会八十年記念誌』）

12　文献足徵　今澤慈海　昭和 30 年代前半　木製　（図書館情報大学旧蔵）

今澤慈海（1883-1968）は、和田萬吉（1865-1934）・村島靖雄（1885-1936）とともに文部省図書館員教習所設立に貢献し、以後、図書館情報大学の前身校にたびたび出講した。図書館の必要性を明示する本扁額は、昭和 30 年代前半、図書館職員養成所での図書室新設時に揮毫されたものと伝える。典拠は『論語』八佾第三で、「夏と殷の制度はわかるが、杞と宋の制度についてはよくわからない。文献（記録資料と伝統を伝える賢人の意）が不足しているからだ。文献があればつかめるわけだが。」の意である（黒岩高明「文献徴するに足る」『たちばな』64）。

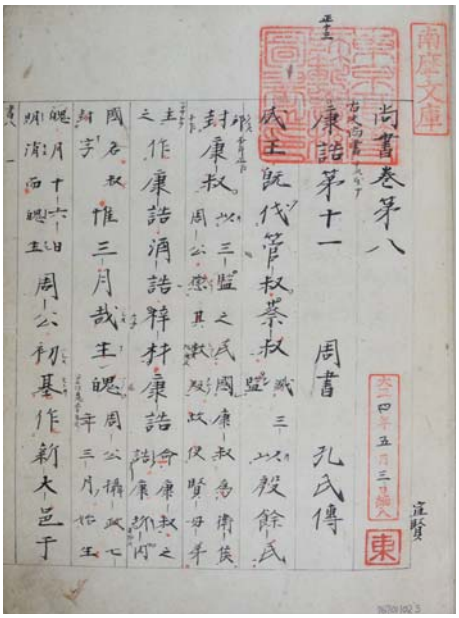
開拓者よもやま話＊第二講

茗溪に咲いた会津の志 ―教育の総本山―

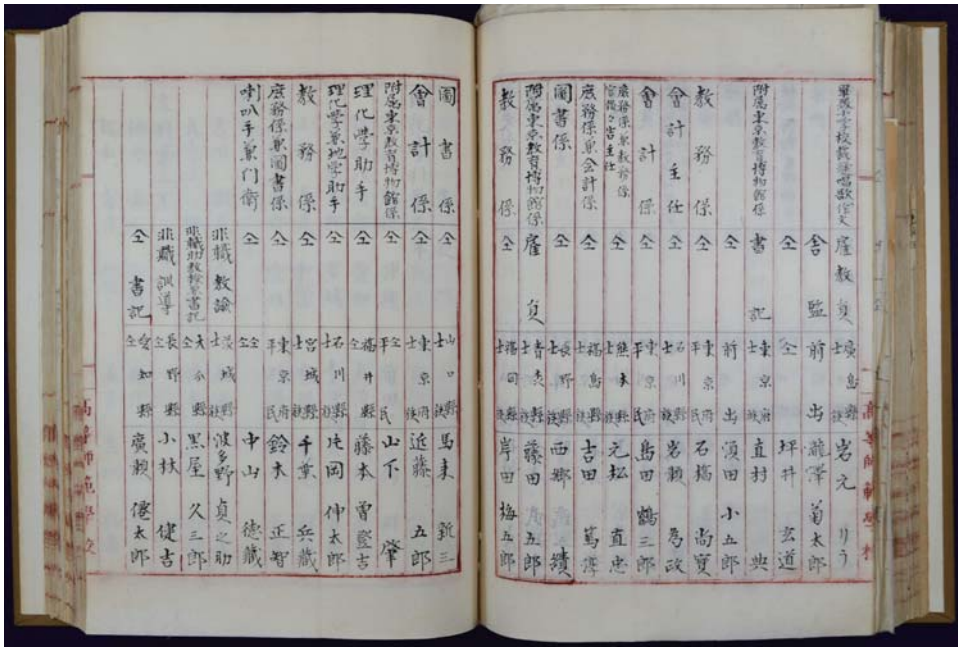
師範学校・高等師範学校の教職員には元士族も多く採用された。そのなかには新時代を切り拓き、志を咲かせんとした旧会津藩士の姿もあった。

東京師範学校・高等師範学校の校長高嶺秀夫（一八五四―一九一〇）、山川浩（旧名大蔵、一八四五―九八）も旧会津藩士である。高嶺・山川は、旧高遠藩士（長野県）の伊澤修二（一八五一―一九一七）とともに、文部大臣森有礼が主導した教員養成制度の改革に尽力し、ペスタロッチ主義を導入するなど、「教育の総本山」の確立にあたった。このほか、教授で漢学者の南摩綱紀（一八二三―一九〇九）も旧会津藩士で、その旧蔵書が「南摩文庫」である。

山川・高嶺は旧会津藩士の就職も斡旋した。その一人に附属東京教育博物館の看守を務めた雇員藤田五郎（一八四四―一九一五）がいる。藤田は、新撰組の隊士斎藤一そのひとに外ならない。斎藤は幕末に会津戦争へ参戦した後、会津藩に召し抱えられ、その斗南（青森県）転封にも従った。その後、警視庁を経て、明治二四（一八九一）年から同三二（一八九九）年まで高等師範学校に奉職し、高嶺が校長となった女子高等師範学校（現国立大学法人お茶の水女子大学）職員に転職した。



13　尚書（古文尚書）巻８
清原宣賢写　永正 11（1514）年
〔南摩文庫〕



14　高等師範学校一覧　明治 28（1895）年　「青森県士族 藤田五郎」が見える。

II　人も知る　茗溪の水　―知の開拓最前線―

「いったい科学というものはどういう意味で価値があるのであろうか。…その答えは、科学のいままでたどってきました歴史、科学がどういうふうにして盛んになり、どういうふうにして衰えたかというふうなことが、非常に参考になるんじゃないだろうか。」

（朝永振一郎「科学と科学者」『科学者の自由な楽園』。初出は一九六五年）

参考４
朝永振一郎先生胸像
（昭和 41（1966）年制作
筑波大学附属小学校所蔵）

本学へ東京教育大学各教室・附属図書館本館から移管された図書・雑誌は、主に中央図書館本館の一階・中二階に集中配架され、東京文理科大学附属図書館によって昭和八（一九三三）年三月を機に設けられた独自の図書分類法によって並べられている（ただし、農学部分館・体育学部分館などの蔵書、昭和四八（一九七三）年度受入以降の蔵書は、現在一般的な日本十進分類法（ＮＤＣ）により別途配架される）。それらは、東京文理科大学の各教室、およびそれらの成立の前提となった師範学校以来の系譜を引く東京高等師範学校における知の開拓と、深い関わりがある。本章では、これらの前身校で活躍した知の開拓者たちを、縁のある資料を通じて振り返ることにしよう。

参考５　東京高等師範学校西館２階の図書閲覧室　（『卒業紀年』（卒業アルバム）昭和５（1930）年）

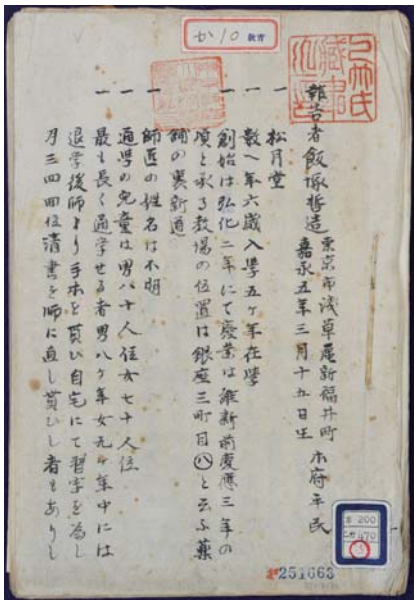
表 1　東京文理科大学の教室

昭和 4（1929）年 4 月 学則		昭和 29（1954）年 閉学時の 35 教室
教育学科	教育学	教育学第一（教育学）・第二（教育史）
	心理学	心理学第一（実験心理学）・第二（教育心理学）
哲学科	哲学	哲学第一（哲学）・第二（哲学史）
	倫理学	倫理学第一（倫理学）・第二（社会学）
史学科	国史学	国史第一（古代・中世）・第二（近世）
	東洋史学	東洋史学第一（古代・中世）・第二（近世）
	西洋史学 (当分之ヲ欠ク)	
文学科	国語学国文学	国語学・国文学第一（国語学）・第二（国文学）
	漢文学	漢文学第一（経子学）・第二（文学・語学）
	英語学英文学	英語学・英文学第一（英語学）・第二（英文学）
数学科	数学	数学第一（代数・数論）・第二（解析学）・第三（幾何学）
物理学科	物理学	物理学第一（力学）・第二（電磁気学）・第三（原子物理学）
化学科	化学	化学第一（物理化学）・第二（有機化学）・第三（分析無機化学）
生物学科	動物学	動物学第一（分類・形態）・第二（生理学）
	植物学	植物学第一（分類・形態）・第二（生理学）
地学科	地理学	地理学第一（自然地理）・第二（人文地理）
	地質学鉱物学	地質学・鉱物学第一（地質学）・第二（鉱物学）

『東京文理科大学閉学記念誌』 により作成。

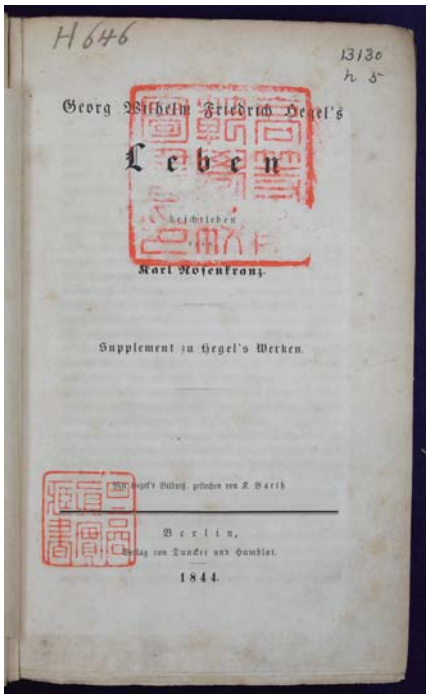
15　*Histoire de la pédagogie.*　G.Compayré.
Paris: P. Delaplane.　〔福富文庫〕

教育の基礎として心理学・生理学を重視したフランスの教育学者ガブリエル・コンペーレ著の教育学史。旧土佐藩士で、『新聞日本』創立連判者としても知られる教育学者、東京高師教授の福富孝季（ふくとみたかすえ）（1857-91）の旧蔵。福富文庫は前身校初の文庫である。文理科大教育学科には教育学・教育史・実験心理学・教育心理学の 4 教室があり、教育学の教授大瀬甚太郎（おおせじんたろう）（1865-1944）は第 2 代学長に就任した。東京高師図画手工専修科卒・本学芸術専門学群初代学群長の松本重雄（1917-）も同学科の出身である。



16　寺子屋報告書（てらこやほうこくしょ）　〔乙竹文庫〕

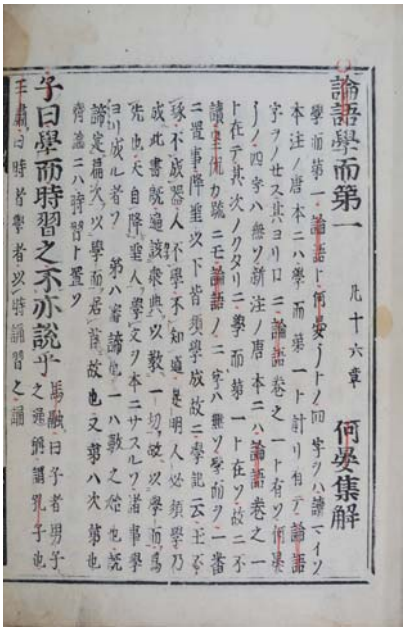
教育学・教育史研究者であった東京高師・文理科大教授乙竹岩造（おとたけいわぞう）（1875-1953）の旧蔵書で、江戸時代の寺子屋「松月堂（しょうげつどう）」の聞き取り調書である。乙竹はこれらの調書や往来物（おうらいもの）と呼ばれる寺子屋の教科書を基に『日本庶民教育史』を著し、昭和 7（1932）年に東京文理科大学から初の学位（文学博士）を授与された。



17 *Georg Wilhelm Friedrich Hegel's Leben.* K. Rosenkranz.

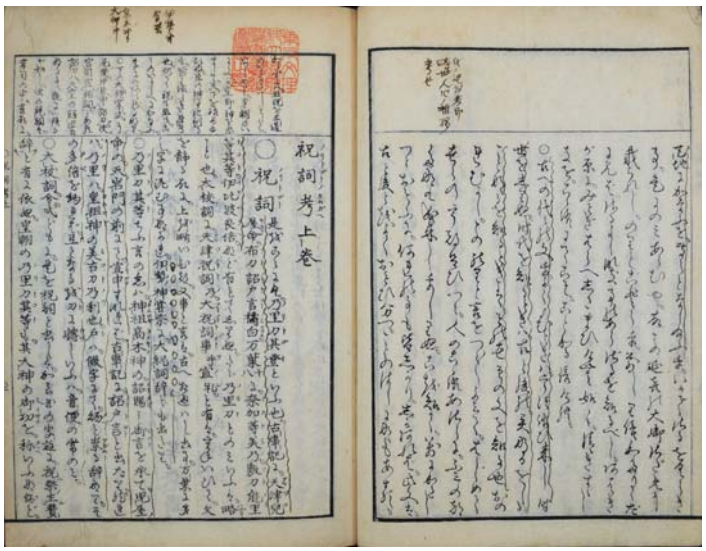
Berlin: Verlag von Duncker und Humblot, 1844. 〔日高文庫〕

ヨハン・カール・ローゼンクランツによるヘーゲルの伝記（邦訳は中埜肇訳『ヘーゲル伝』）。日本の教育学の祖と評される高師教授日高真実（1864-94）の旧蔵書で、留学先のドイツ・ベルリンで購入した際の署名がある。日高は帰国後に急逝したが、その収集洋書は寄贈され、校長嘉納治五郎（1860-1938）や同校英語教師であった夏目金之助（漱石、1867-1916）、さらには北里柴三郎ら学外者も含む 447 名の賛同・寄附によって日高文庫が設立された。ヘーゲル研究者は、東京文理科大学第 5 代学長務台理作（1890-1974）をはじめ、本学・前身校に少なくない。



18 論語抄 慶長 - 元和年間（1596–1624）刊 〔林文庫〕

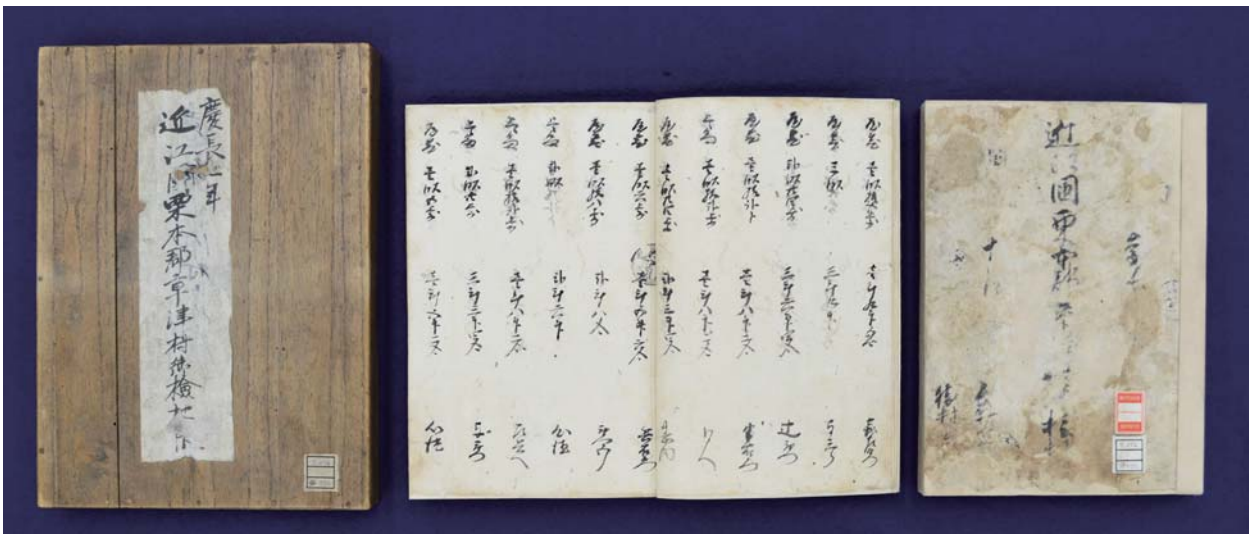
林泰輔（1854-1922）は東京高師教授で漢学者、日本の甲骨学の先駆者でもあった。著書『周公と其時代』で学士院恩賜賞を受賞した。林の蔵書のうち『論語』『論語抄』『論語釈義』『論語講説』をはじめとする漢学書は、大正 11（1922）年に東京高師へ寄贈された。



19 祝詞考 賀茂真淵 加藤伴之翻刻

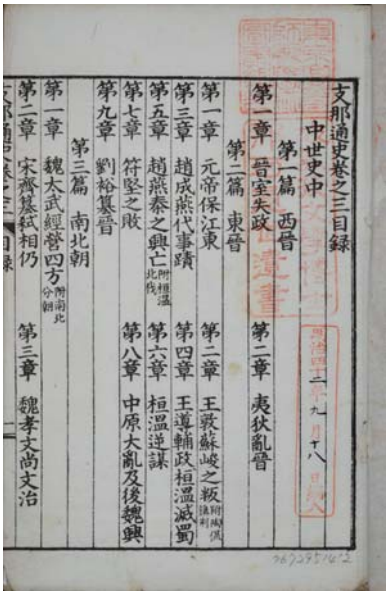
明治 16（1883）年刊 〔補永文庫〕

文理科大倫理学教室は、教授友枝高彦（1876-1957）を中心に、法律・政治・経済も含む社会学の中に人倫の根本を探求した。補永茂助（1881-1932）は、その初期、昭和 6･7 年度（1931-33）に講師を務めた。とくに日本思想に明るく、外国人の神道観を研究した。



20　近江国栗本郡草津村御検地帳　慶長 7（1602）年

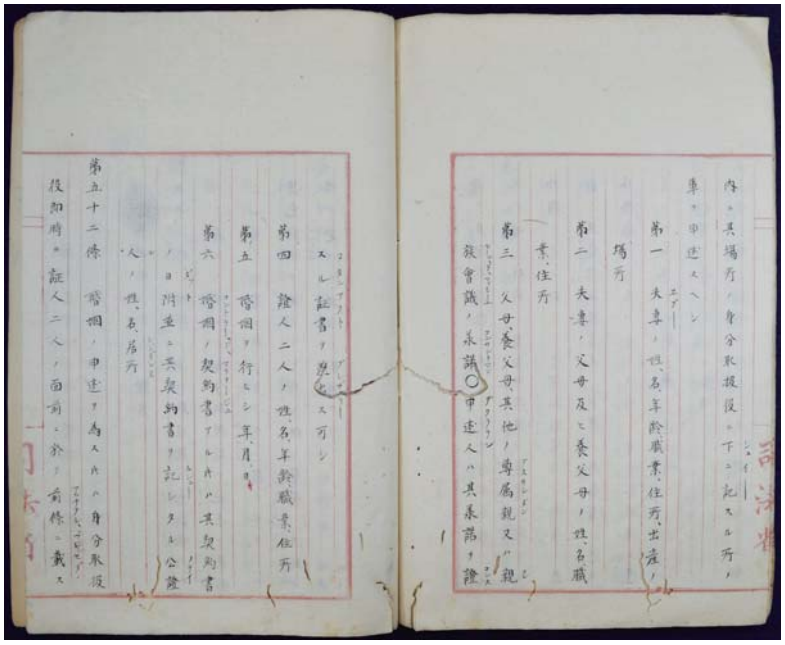
文理科大・東京高師教授肥後和男（1899-1981）が宮座資料として購入したと見られる検地帳の一つ。肥後は生活史・民俗学的視座から日本古代史・神話学・精神史を講じたが、昭和 21（1946）年に公職追放された。解除後に復帰し、教育大体育学部教授、附属図書館長を歴任した。



21　支那通史　那珂通世

上海：東文学社　光緒 25（1899）年刊　〔那珂文庫〕

元盛岡藩士の東京高師教授で、「東洋史」を提唱した漢学者那珂通世（1851-1908）の著書。岩波文庫にも収められる。明治 42（1909）年に那珂の遺族又世から購入した那珂文庫には、「故教授文学博士那珂通世遺書」の印記がある。



22　司法省民法編纂局 民法草案

明治中期　〔穂積文庫〕

本資料は、穂積陳重が起草に関わった明治民法の草案で、司法省の罫紙に記される。文理科大・東京高師の教授で、後に教育大文学部長も務めた法学者稲田正次（1902-84）が科学研究費で購入した穂積陳重・重遠父子の旧蔵書。重遠は高師附属小学校・中学校卒。その子重行（1921-）は教育大教授で、西洋史を専攻した。

23 ***De l'administration des finances de la France. tome I.***
J.Necker. 1785.

著者ジャック・ネッケルはフランス革命前夜に活躍したスイス人銀行家・政治家で、ルイ 16 世時代には財務長官を務めた。本書はその一時罷免中に執筆されたフランス財政学の研究書である。東京高師には箕作元八（1862-1919）、峯岸米造（1870-1947）、オリエント史の杉勇（1904-89）、そしてフランス史の中川一男（1893-1948）など多様な西洋史家がいたが、専攻創設は昭和 21（1946）年。文理科大での教室はついに未設置に終わった。

開拓者よもやま話＊第三講

昇格か、廃校か
―東京文理科大学の成立―

大正八（一九一九）年一二月のことである。

「八日朝、母校の東館の入口に墨痕したたる大文字の檄文が貼り出された。それを登校して来られた英文学の泰斗岡倉由三郎教授が見てビックリ、階段をかけのぼって教官室に飛び込むや、「大変々々、ショウカクカ、ハイコウカ」と叫んだ。すると「大日本国語辞典」の松井簡治教授が「どっちも苦手だな。書を書くか、俳句か……」と言うと、岡倉教授「そうじゃないんですよ。昇格か廃校か、ですよ。」（丸山林平「東京文理科大学を回顧する」『茗溪』四一三）

東京高等師範学校長時代の嘉納治五郎は、師範大学への発展を構想したが、世論では不要論も繰り返される。世界大戦後、大正デモクラシー下で大学の「大衆化」が進むと、東京高等商業学校（現 国立大学法人一橋大学）・東京高等工業学校（同東京工業大学）などとともに大学昇格を目指すが、高等商業学校の昇格（大正九（一九二〇）年）のみが先行してしまう。

そして「教育尊重」「精神文化之宣揚」を唱え、教授・生徒・卒業生の「三角同盟」による大学昇格運動が開始される。卒業生で当時は体育科漢文講師であった峯間信吉（一八七三―一九四九）に促された生徒が冒頭の檄文を発する。教授会は三宅米吉を中央委員会委員長とし、同窓会の茗溪会は卒業生の川村理助を委員長、為藤五郎を副委員長とする実行委員会を発足させる。五日夜には、宣揚歌「桐の葉」が誕生する。本科二年の城生資雄（後に大和に改姓。専門は英文学）によって古新聞紙に書かれた下記の詞は、「昔の慶應義塾の応援歌」の節によって歌われる。原敬が率いる政友会内閣をも揺さぶり、一五日の文部大臣中橋徳五郎の声明によって運動は一段落する。

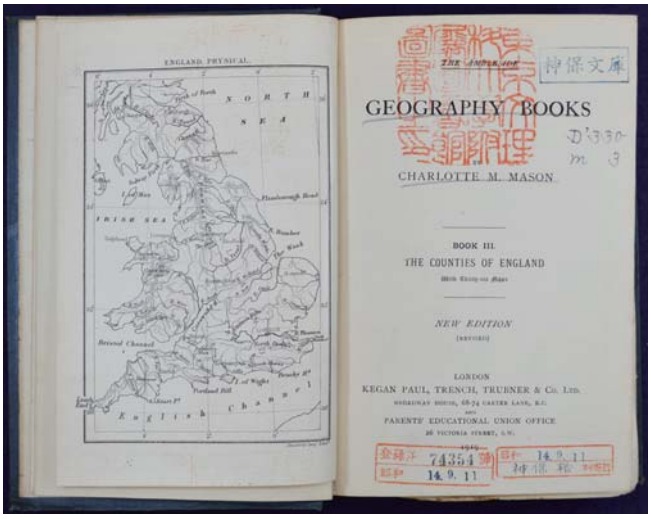
文部省は最終的に高師の専攻科を大学化し、高師をその附置とすることとした。大正一二（一九二三）年三月に貴族院でその予算は通過したが、関東大震災によって延期された。そして、昭和四（一九二九）年の官立文理科大学官制公布により、一学部制・教員養成重視・講座制不採用など、既存の帝国大学にない特色をもつ東京文理科大学が開学した。

宣揚歌

一、桐の葉は木に朽ちんより
秋来なば先駆け散らん
名のみなる廃墟を捨てゝ
さめて立つ男の子ぞ我等

二、日の本の教への庭に
いと高き学び舎ありと
人も知る茗溪の水
よし枯れよ濁さんよりは

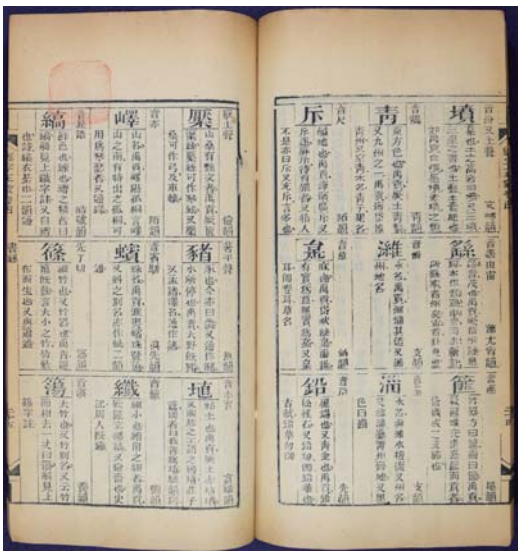
参考６ 東京文理科大学・東京高等師範学校
（木代修一氏収集日本文化史関連資料）



25 ***Geography Books. Bk.3.*** **C.M.Mason.**

London: K.Paul, Trench, Trubner, 1919.〔神保文庫〕

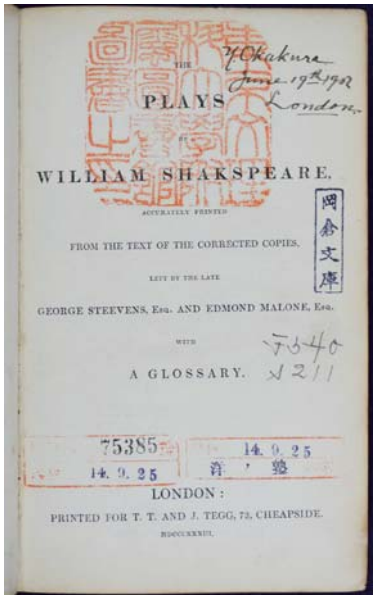
東京高師・文理科大教授で、日本における音声学の基礎を築いた言語学者である神保格（じんぼうかく）（1883-1965）の旧蔵書。イギリスの教育者シャーロット・メイソンが著した万国地理に関する教科書の第３巻で、イギリス地誌を叙述する。



24 経字正蒙（けいじせいもう） 附分画便査（ふぶんかくべんさ） **（清）李文沂（りぶんぎ）**

博文軒　光緒 18（1892）年刊〔内野文庫〕

宋代に儒家が重用した十三経を解説する漢籍。東京高師・文理科大教授の漢学者内野台嶺（うちのたいれい）（1884-1953）の旧蔵書。内野は蹴球（サッカー）の指導者としても知られ、日本サッカー協会のシンボル「八咫烏（やたがらす）」の発案者の一人でもある。



26 The Plays of William Shakspeare: Accurately Printed from the Text of the Corrected Copies. **G.Steevens & Malone,E.(eds.).**

London: T.T. & J.Tegg, 1833.〔岡倉文庫〕

本書のようなシェークスピアの作品集は、英文学研究に欠かすことができない。近代美術界の先覚者岡倉天心の実弟である東京高師教授岡倉由三郎（おかくらよしさぶろう）（1868-1936）旧蔵で、扉にその署名がある。岡倉は英語学者・英文学者で、研究社『新英和大辞典』の編者としても知られ、教育大教授福原麟太郎（ふくはらりんたろう）（1894-1981）をはじめ多くの人材も育成した。岡倉文庫は英語・ドイツ語・フランス語・オランダ語・ラテン語・朝鮮語などの文献から成り、幕末から明治初年にかけての稀少な辞典・学習書も含む。

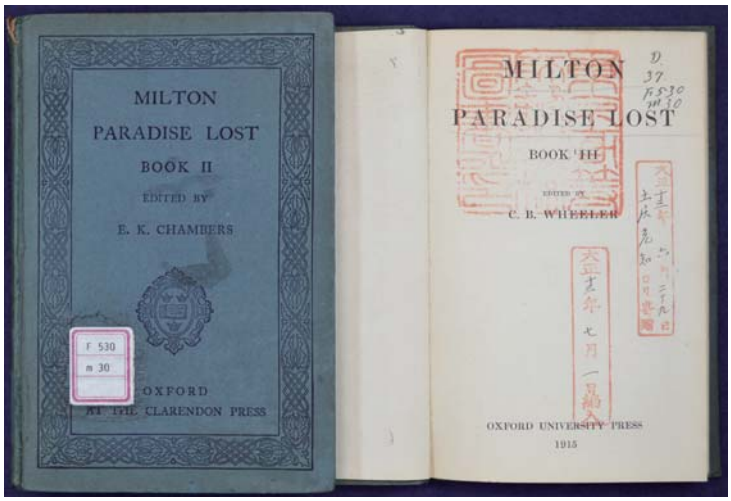
27 ***Paradise Lost. Bk.2,3.***

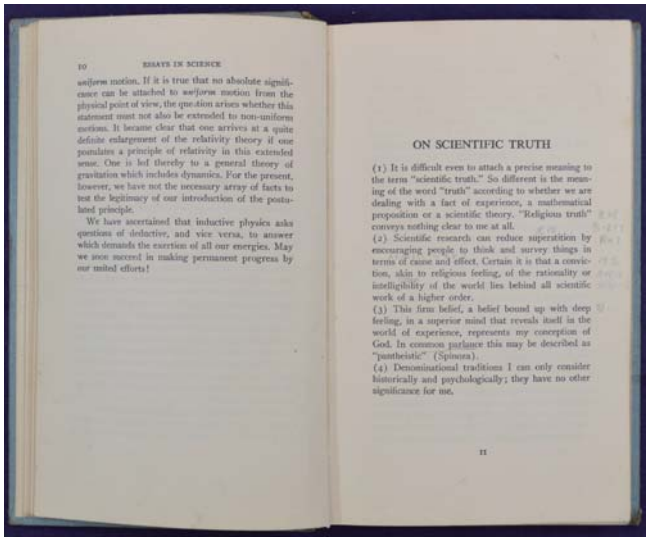
Milton; E.K.Chambers(ed.).

Oxford: Clarendon Press, 1906-15.

〔土居文庫〕

旧約聖書『創世記』を主題にした初期近代英語による叙事詩であるイギリスの詩人ミルトンの『失楽園』第２・３巻で、東京高師教授の英文学者土居光知（どいこうち）（1886-1979）旧蔵。土居は文化人類学・比較神話学も学び、古代文芸・東西比較文学などを論じた。





10 ESSAYS IN SCIENCE

uniform motion. If it is true that no absolute significance can be attached to *uniform* motion from the physical point of view, the question arises whether this statement must not also be extended to non-uniform motions. It became clear that one arrives at a quite definite enlargement of the relativity theory if one postulates a principle of relativity in this extended sense. One is led thereby to a general theory of gravitation which includes dynamics. For the present, however, we have not the necessary array of facts to test the legitimacy of our introduction of the postulated principle.

We have ascertained that inductive physics asks questions of deductive, and vice versa, to answer which demands the exertion of all our energies. May we soon succeed in making permanent progress by our united efforts!

ON SCIENTIFIC TRUTH

(1) It is difficult even to attach a precise meaning to the term "scientific truth." So different is the meaning of the word "truth" according to whether we are dealing with a fact of experience, a mathematical proposition or a scientific theory. "Religious truth" conveys nothing clear to me at all.

(2) Scientific research can reduce superstition by encouraging people to think and survey things in terms of cause and effect. Certain it is that a conviction, akin to religious feeling, of the rationality or intelligibility of the world lies behind all scientific work of a higher order.

(3) This firm belief, a belief bound up with deep feeling, in a superior mind that reveals itself in the world of experience, represents my conception of God. In common parlance this may be described as "pantheistic" (Spinoza).

(4) Denominational traditions I can only consider historically and psychologically; they have no other significance for me.

11

29 ***Essays in Science.*** **A.Einstein.**
New York: Philosophical Library, 1934.

文理科大の物理学教室は、昭和16（1941）年に理化学研究所から招かれた朝永振一郎（1906-79）によって飛躍的に発展した。それ以前にも、日本における原爆計画でも著名な同所の仁科芳雄（1890-1951）が出講しており、戦前期の国内で最先端の量子物理学が講じられていた。これに呼応して附属図書館の物理学分野の蔵書数も増加するが、その1冊として、アインシュタインの小文集をあげておく。朝永は、日本学士院賞、文化勲章、そして、昭和40（1965）年に「くりこみ」理論によってノーベル物理学賞を受賞した。教育大第2代学長としても活躍し、そのリベラルな運営方針は「朝永原則」として賞讃された。本学にはその記念室（大学会館・筑波大学ギャラリー内）が設けられているが、朝永の研究者、大学人としての姿勢は、現代にこそ学ばなければいけない。

28 ***Histoire des mathématiques.*** **J.Boyer.**
Paris: G.Carré et C.Naud, 1900.

〔千本文庫〕

東京高師教授であった数学者千本福隆（1854-1918）旧蔵。数学史の概説書で、挿絵の銅版画が美しい。千本は、後藤牧太（物理学、1853-1930）・那珂通世（前掲）・三宅米吉（後掲）とともに東京高師の「四天王」の一人（後には大瀬甚太郎（前掲）、丘浅次郎、松井簡治（以上後掲）、山崎直方（地理学、1870-1929）も当てる）。東京高師・文理科大の数学教室では、代数学の「森田理論」で著名な森田紀一（1915-95）も活躍した。

30 **化学新篇** **池田菊苗・和田猪三郎**

金港堂書籍　明治33（1900）年刊　　**〔明治以降教科書〕**

化学教育の教科書で、高師・東京高師・文理科大教授を務めた和田猪三郎（1870-1962）らが高師附属中学校（現 附属高等学校）に寄贈したもの。和田は理化学研究所の研究員も務め、純粋白金分離法を完成するなど、稀有元素（希元素）の先端的研究者であった。

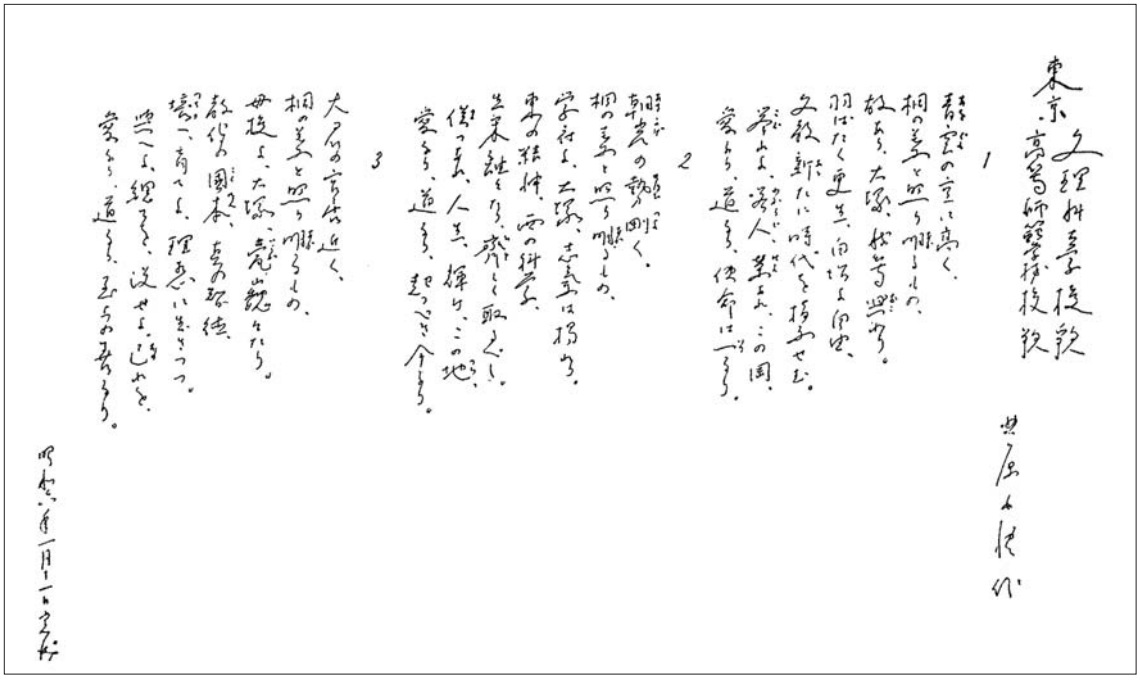
自治よ自由　―校歌と戦時体制―

筑波大学には正式な校歌はない。「常陸野の」「筑波のガマ」は学生歌、「雲ひかり飛ぶ」は応援歌（以上、昭和五一（一九七六）年九月制定）、「Imagine the Future」はメッセージソング（平成二一（二〇〇九）年四月制定）である。

前身校の東京文理科大学・東京高等師範学校には校歌が存在した。作詞は北原白秋、作曲は山田耕筰という豪華なコンビによる。制定されたのは昭和六（一九三一）年のことであった。同曲はＣＤ『紫峰の霞 茗溪の水』（紫峰会・筑波大学学生有志、一九九九年）にも、当時の楽譜に基づく男声合唱が収められており、聴くことができる。

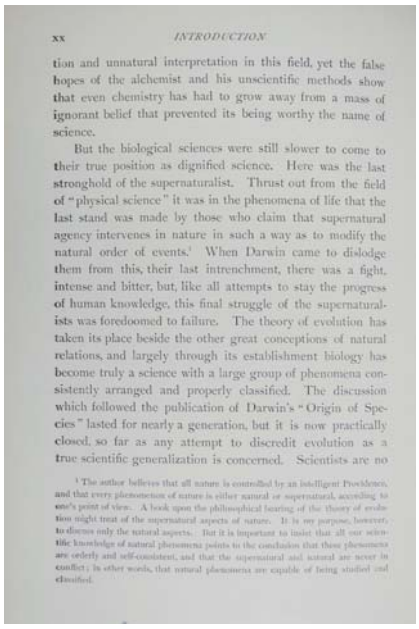
ところが、この歌詞が昭和一五（一九四〇）年に突如改正された。時局に応じ、一番の「羽ばたく更正 自治よ自由」の歌詞が「往くべし正大 明日の儀表」と改められた。この前年には負傷した軍人を中等学校の教員とするべく、軍事保護院による軍事援護策の一つとして傷痍軍人中等学校教員養成所（戦後に東京特設中等教員養成所と改称）が東京高師内に付設されていた。戦時体制へと進む中で、国家の「儀表」（規範）となる教員を養成する役割を負わされたのである。

昭和二四（一九四九）年に四つの大学・専門学校を包括して成立した東京教育大学でも、この校歌が継承された。しかし、その歌詞は「往くべし正大 明日の儀表」のまま、同五三（一九七八）年の閉学を迎えた（前掲ＣＤのライナーノートはこの歌詞を採用）。同窓会である茗溪会の会報『茗溪』には、この間に「自治よ自由」の歌詞を懐かしみ、また、旧態に戻すように求める同窓生の強い思いがしばしば寄せられている。



参考７　北原白秋自筆の校歌

（東京文理科大学・東京高等師範学校大塚学友会編『校歌』昭和６（1931）年）

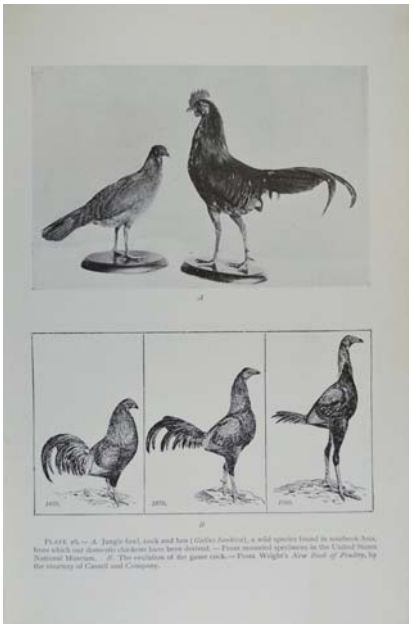


xx INTRODUCTION

tion and unnatural interpretation in this field, yet the false hopes of the alchemist and his unscientific methods show that even chemistry has had to grow away from a mass of ignorant belief that prevented its being worthy the name of science.

But the biological sciences were still slower to come to their true position as dignified science. Here was the last stronghold of the supernaturalist. Thrust out from the field of "physical science" it was in the phenomena of life that the last stand was made by those who claim that supernatural agency intervenes in nature in such a way as to modify the natural order of events.[1] When Darwin came to dislodge them from this, their last intrenchment, there was a fight, intense and bitter, but, like all attempts to stay the progress of human knowledge, this final struggle of the supernaturalists was foredoomed to failure. The theory of evolution has taken its place beside the other great conceptions of natural relations, and largely through its establishment biology has become truly a science with a large group of phenomena consistently arranged and properly classified. The discussion which followed the publication of Darwin's "Origin of Species" lasted for nearly a generation, but it is now practically closed, so far as any attempt to discredit evolution as a true scientific generalization is concerned. Scientists are no

[1] The author believes that all nature is controlled by an intelligent Providence, and that every phenomenon of nature is either natural or supernatural, according to one's point of view. A book upon the philosophical bearing of the theory of evolution might treat of the supernatural aspects of nature. It is my purpose, however, to discuss only the natural aspects. But it is important to insist that all our scientific knowledge of natural phenomena points to the conclusion that these phenomena are orderly and self-consistent, and that the supernatural and natural are never in conflict; in other words, that natural phenomena are capable of being studied and classified.



31 ***An Outline of the Theory of Organic Evolution: With a Description of Some of the Phenomena Which It Explains.*** **M.M.Metcalf. New York: Macmillan, 1904.** **〔丘文庫〕**

動物学、ことに進化論の研究で著名な丘浅次郎（1868-1944）の旧蔵書。詳細な挿絵が含まれる。丘の研究は生物の進化だけでなく、人間社会の進化までも論じ、同時代の人文・社会科学にも大きな影響を与えた。

32 解体新書

與般亜覃闕児武思（杉田玄白・吉雄永章訳）

安永 3（1774）年刊

本書は、原典ドイツ語からのオランダ語訳『ターヘル・アナトミヤ（解剖学表）』（1734 年刊）を漢訳した、日本洋学研究の記念碑的著作であることは言うまでもあるまい。小田野直武の模写による本書の挿絵を原資料によって味わいたい。

33 千種之花　増訂版　幸埜楳嶺　明治 23-24（1890-91）年刊

明治中期の版本で、全 4 冊から成る植物図鑑。美麗な多色刷図版のうち、ここでは「茗溪」（「東京都文京区御茶の水の谷の雅称」（諸橋轍次編『大漢和辞典』）の意）にちなみ、茗花を示す。文理科大の植物学科は、教授矢部吉禎（1876-1931）によって整備された。

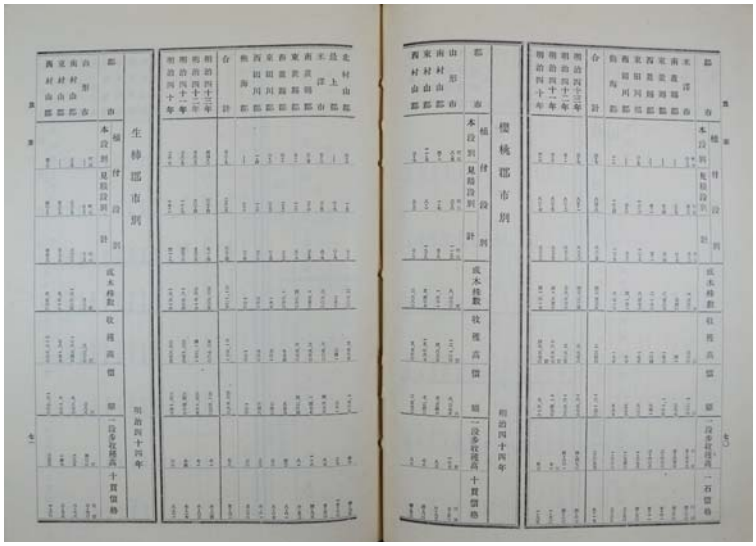
34　明治44年山形県統計書 勧業之部

山形県編　山形県

大正3（1914）年刊

〔加藤文庫〕

東京高師教授加藤鉄之助（1883-1915）は地理学者。大正4（1915）年寄贈の旧蔵書は、海外の地理学理論を紹介し、日本内外への実地調査にも精力的であったその学究心を物語る。



35　古郷帰の江戸咄

貞享4（1687）年刊

師範学校以降、前身校では多数の地誌が収集された。地方出身者が江戸を見物する趣向で著された本書は、国内有数の善本で、朝倉治彦監修『古板地誌叢書』の底本に使用された。左図は上野の不忍池の場面。文理科大には、大学としては東京・京都の帝国大学に次ぐ地理学教室が田中啓爾（1885-1975）を主任として設置された。

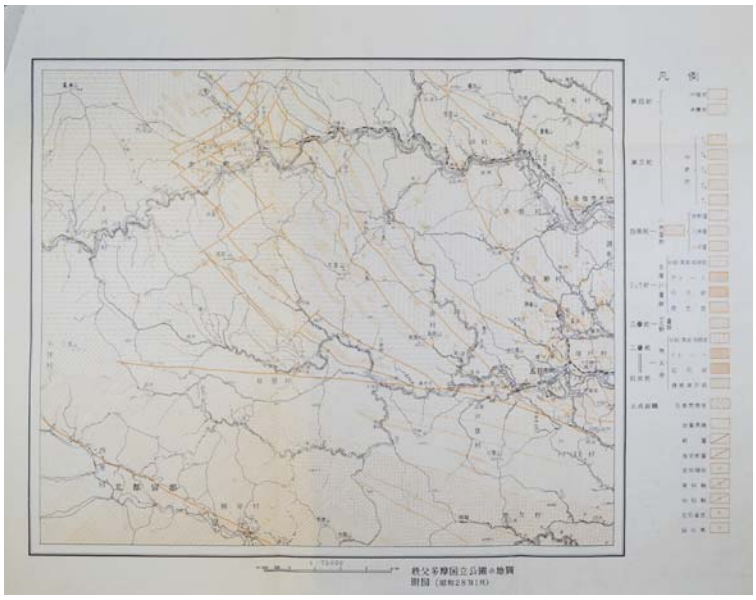
36　秩父多摩国立公園の地質

藤本治義

東京都建設局公園緑地部

昭和28（1953）年刊

本書は文理科大教授藤本治義（1897-1982）が東京都から委嘱されて執筆した地質調査報告書である。地質学・鉱物学は師範学校以来の研究蓄積をもつが、文理科大での教室創設は昭和17（1942）年9月のことであった。



Ⅲ　いと高き 知の殿堂 ―附属図書館の黎明―

知の開拓に不可欠な図書・雑誌を提供し、また、その成果を発信していくことは、大学附属図書館のミッションである。東京師範学校本館内に図書室がはじめて設けられたのは明治一一（一八七八）年である。その管理運営に図書係事務監督として教諭が充てられたのは同三二（一八九九）年、嘉納治五郎校長の時代であり、その信頼厚い三宅米吉が任命される。三宅は四年後、大塚窪町へ移転した校地で単立の建築を有する図書館が設置されると、その初代主幹となる。二代主幹は松井簡治で、東京文理科大学が開学して附属図書館が置かれると、館長にも就任し、諸橋轍次、能勢朝次が続いた。知の開拓者でもあった彼らが知の殿堂たる図書館を充実させるべく牽引していく。

参考 8　嘉納治五郎先生像

（東京キャンパス占春園内）

朝倉文夫制作。昭和 11（1936）年に旧本館前へ建てられた喜寿記念の像は戦時中に供出され、没後 20 年目の昭和 33（1958）年にその原型を用いて現在地に再建された。筑波キャンパス大学会館前にも平成 22（2010）年 12 月に生誕 150 年を記念し、同じ原型を基にした像が建立された。

参考 9　絵葉書「東京高等師範学校運動場ヨリ図書館及教場ヲ望ム」

表面に明治 39（1906）年 2 月 7 日の消印がある。写真中央に見える東京高等師範学校図書館は、嘉納治五郎校長時代の同 36（1903）年、大塚窪町移転にさいして設置された。これは書庫のみで、閲覧室・事務室は同 45（1912）年に講堂内へ仮設された。大正 8（1919）年に閲覧室用の建物がようやく増築されたが、同 12（1923）年に類焼（31 頁参照）、翌 13 年の激震でも被災した。

参考 10　三宅米吉肖像　（木代修一氏収集日本文化史関連資料）

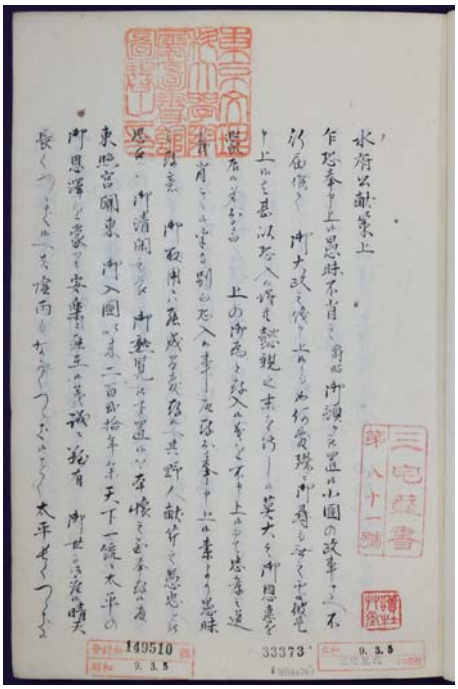
校長時代の大正 14（1925）年ごろ、東京高等師範学校本館前にて撮影。三宅の下で助手を務めた教育大名誉教授木代修一（きしろしゅういち）氏（1898-1988）収集日本文化史関連資料は、三宅家から託された関係資料を含むもので、本学名誉教授芳賀登（はがのぼる）（1926-2012）の尽力によって平成 12（2000）年度に寄贈された。三宅の図書係事務監督在任中である明治 35（1902）年には、『東京高等師範学校洋書目録』（明治 34 年 7 月現在）が公刊された。

三宅米吉（一八六〇―一九二九）

高等師範学校・東京高等師範学校図書係事務監督（一八九九―一九〇三）

東京高等師範学校図書館初代主幹（一九〇三―一一）

和歌山県生まれ（旧紀州藩士）。専門は歴史学・考古学・国語教育。明治八（一八七五）年に慶応義塾諭旨退学。九年に官立新潟英語学校教員心得。一四年に東京師範学校助教諭。一九年に教科書会社金港堂勤務。二八年に高等師範学校教授。以後、東京高等師範学校教授、校長、東京文理科大学初代学長。また帝室博物館（現 東京国立博物館）総長を兼任。この間、明治二五年に金印の「漢委奴国王」の読みを『史学雑誌』に発表（以後、定説となる）。三四年に考古学会創設。同年に文学博士。主要著書に『日本史学提要』第一編、『文学博士三宅米吉著述集』。



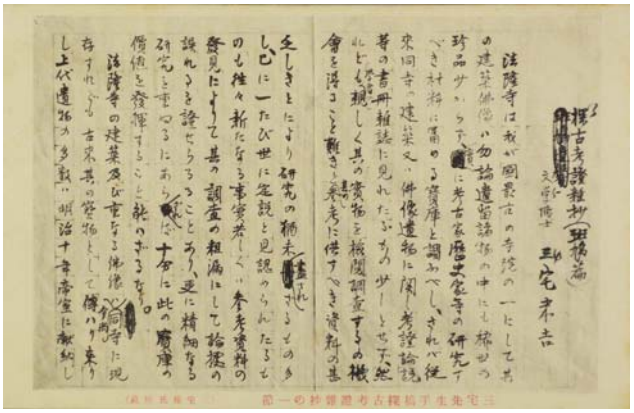
37　水府公献策（すいふこうけんさく）　江戸時代後期　〔三宅文庫〕

水戸藩主徳川斉昭（とくがわなりあき）が内憂外患を唱え、対外関係のあり方について幕府へ献言した著名な献策書の写本である。三宅が書物収集家として著名な寺田望南（てらだぼうなん）から譲り受けた一冊である。

38　東大寺国宝金銅八角燈籠 音声菩薩図拓本

紙本・額装

教育大附属図書館内に掲げられていたと伝えられる拓本。三宅は、「探古考証雑抄（東大寺諸物）」（1899 年）で、この燈籠を奈良時代の古物として紹介している。三宅の業績に関連させて、ここに紹介する。



参考 11　三宅米吉先生像の写真とその再建記念絵葉書

（『三宅米吉先生胸像』、三宅米吉先生追憶の会、昭和 34（1959）年。木代修一氏収集日本文化史関連資料）

昭和 9（1934）年に造られた三宅米吉像は、嘉納治五郎像（参考 8）とともに本館前にあったが、戦時中に供出され、昭和 34 年に再建された。制作は教育大教育学部芸術学科教授木村珪二（1904-71）、書は諸橋轍次（後掲）。この胸像は現在も本学東京キャンパスに隣接する筑波大学附属小学校内に所在する（執筆にあたっては同校長・人間系教授窪田眞二氏の御教示を得た）。右の絵葉書は再建時の記念絵葉書のうち「探古考証雑抄（斑鳩篇）」（『考古学雑誌』に 4 回連載、1910-11 年）の原稿の写真。

開拓者よもやま話＊第五講

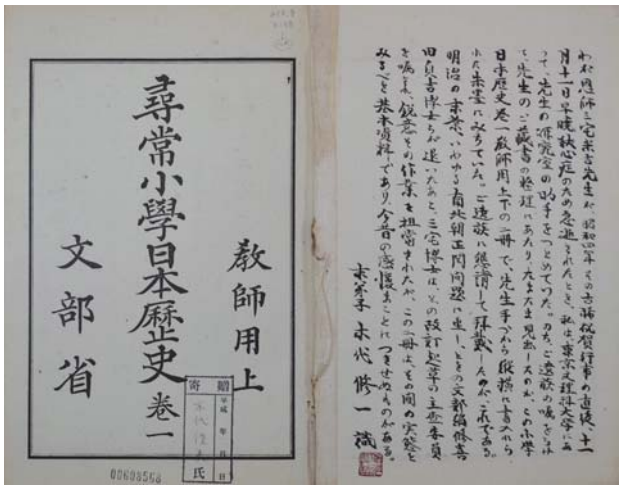
三宅米吉と歴史教科書 ―明治四四年南北朝正閏問題―

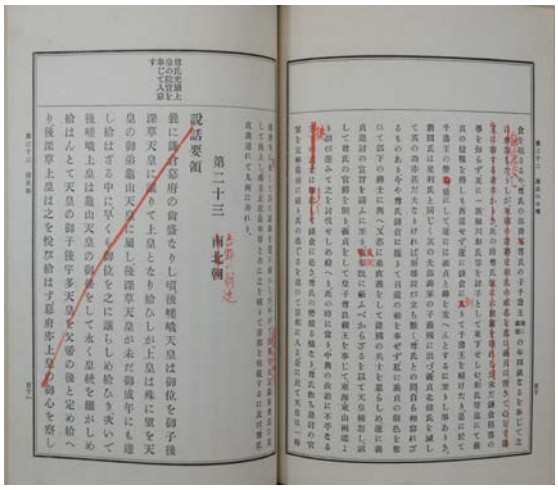
三宅米吉の「末弟子」を自称した木代修一が恩師の遺族から託された関係資料の一つに、明治四三（一九一〇）年改定の『尋常小学日本歴史』巻一 教師用（上・下二冊）がある。これは前年の児童用教科書改定に続くものである。木代が表紙の裏に記すように、これこそが明治四四（一九一一）年に「国民思想上の大問題」として政治問題化された国定教科書に外ならない。

皇統は一四世紀に南朝・北朝に分立し、その統一後は北朝天皇の子孫に継承された。しかし、皇位の象徴である三種の神器の所在を見れば、大義名分論的には南朝が「正」（正統）、北朝が「閏」（異端）である。現在の日本史学では両朝が並立したとする見解が有力であるが、皇室の歴代表では南朝正統説に立つ。

問題の教科書では教科書編修官喜田貞吉によって両朝並立説が採用された。南朝正統論者は、これを皇統の正統性、国民道徳をもゆるがせにする「反逆幇助」と訴えた。高等師範学校の卒業生で当時、本郷区（現 東京都文京区）富士前小学校長であった峯間信吉は、同窓生の新聞記者豊岡茂夫（半嶺）に促し、四四年一月一九日付け『読売新聞』で社説「南北朝対立問題（国定教科書の失態）」を発表させた。それはくしくも大逆事件の大審院判決当日で、社会主義者幸徳秋水が裁判中に明治天皇を逆賊北朝の子孫と罵倒したとの報道も相まって、世論を刺激した。ついには、早稲田大学教員松平康国・牧野謙次郎が仕組み、第二七期帝国議会に質問書が提出されて政治問題と化し、桂太郎内閣の不祥事として追求する野党立憲国民党による内閣弾劾決議案提出にまで展開した。桂は元老山県有朋の助言も得て収拾を図り、二月二七日に喜田の休職処分、教科書の使用禁止を決し、さらに、明治天皇の裁断を仰いで三月七日に南朝を正統とする教科書修正要旨を発表した。その修正の主任を命じられたのが三宅米吉であった。

件の教科書には「南北朝」の見出しを「吉野の朝廷」と改めるなど、多数の加除修正がある。三宅は、文部省による歴代表が学者の異論によって議論したり改定したりできる性格のものでなく、あくまでその趣旨を体して児童に教授すべき、との立場に立ち、同年七月の刊行を遂行した。研究と教育を弁別し、この難局に対応したのである。



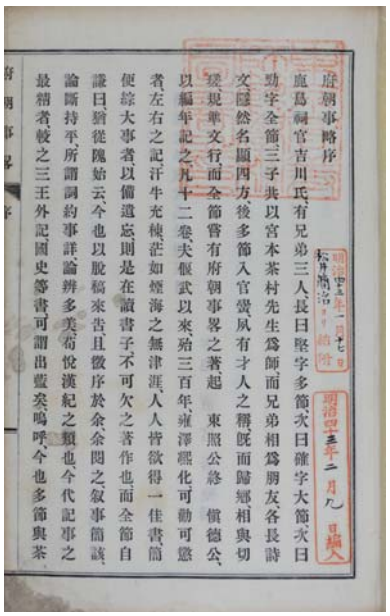


39 尋常小学日本歴史 巻1 教師用 文部省 明治43（1910）年刊
（木代修一氏収集日本文化史関係資料）

松井簡治（一八六三―一九四五）

東京高等師範学校図書館二代主幹（一九一一―二九）
東京文理科大学附属図書館初代館長（一九二九―三二）

千葉県銚子町（現 銚子市）生まれ（新生村名主・神明宮他神主宮内君浦の子）。専門は国語学・国文学。明治二三（一八九〇）年に文科大学（現 国立大学法人東京大学）教育学科卒業。学習院教授を経て三四年に高等師範学校教授、以後、東京高等師範学校教授、東京文理科大学教授。この間、大正八（一九一九）年に『大日本国語辞典』（上田万年と共編著）刊行完結。九年に文学博士。昭和七（一九三二）年に退官。二〇年に疎開先の栃木県足尾（現 日光市）で没。



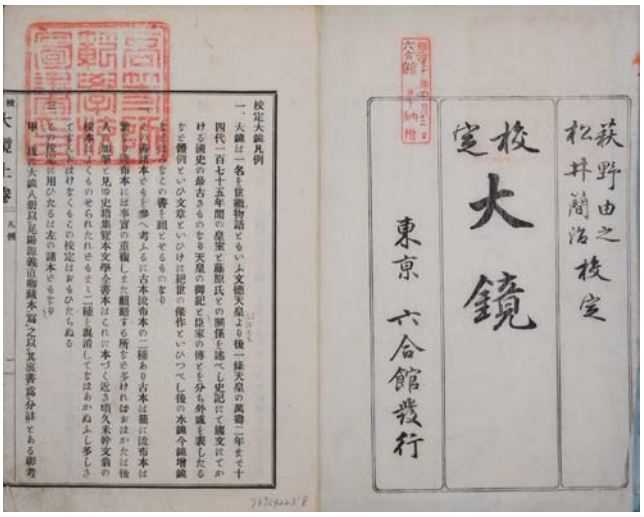
40　府朝事略　吉川久勁　若不足塾
明治 34（1901）年刊

初代家康から 12 代家慶に至る徳川幕府史の概説書。松井簡治寄贈。

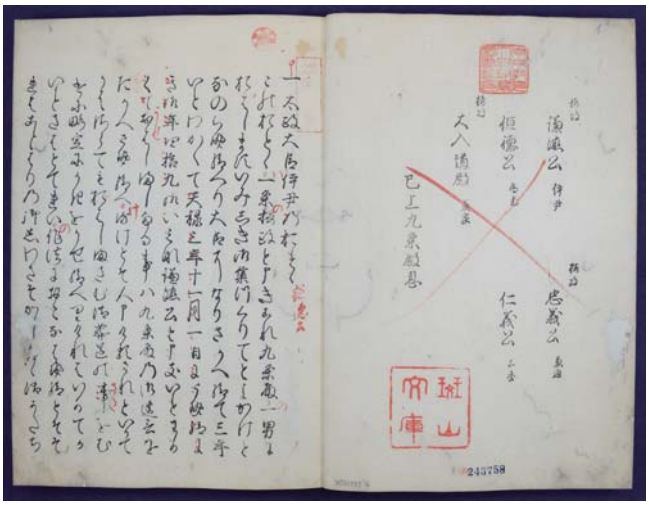
松井主幹・館長時代の大正 4（1915）年には『東京高等師範学校図書館和漢書書名目録』（大正元年 12 月現在）が刊行され、また分類目録の刊行準備も始まった。

研究者としての松井は『大鏡』『増鏡』『徒然草』『太平記』など多くの古典を教材化した。41 は、異本の多い『大鏡』を校訂し、出版したもの。

42 は、朱子学者藤原惺窩旧蔵、慶長年間（1596-1615）ごろの古活字本『大鏡』（6 巻本の 1 巻）。本展の準備中に、惺窩の「冷泉府書」、戦前の所有者高野辰之の「斑山文庫」の印記が確認された。高野の没後、昭和 28（1953）年に教育大で購入された。松井退官後も善本の収集は続いた。



41　校定大鏡　萩野由之・松井簡治校定 六合館 明治 30（1897）年



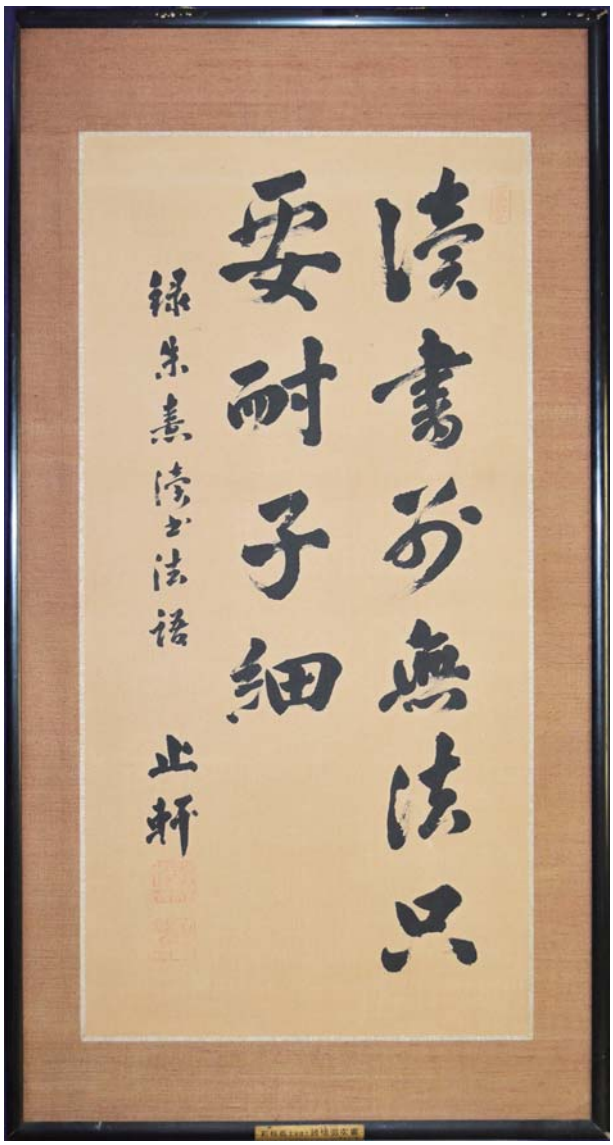
42　大鏡　慶長年間（1596-1615）刊

左は藤原惺窩の蔵書印「冷泉府書」。

諸橋轍次（一八八三―一九八二）

東京文理科大学附属図書館二代館長（一九三二―四五）

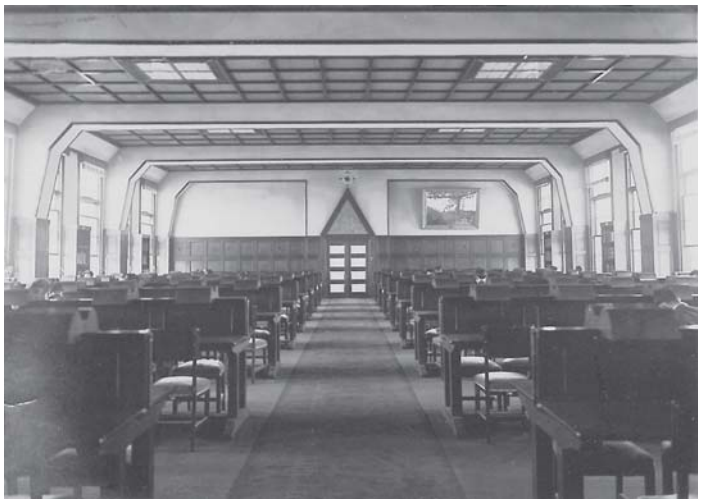
新潟県南蒲原郡四ツ沢村（旧下田村・現三条市）生まれ。専門は漢学・漢文学。明治四一（一九〇八）年に東京高等師範学校国語漢文科卒業。群馬県師範学校教諭を経て四三年に東京高等師範学校助教諭、以後、教諭、教授、東京文理科大学助教授、教授。この間、昭和四（一九二九）年に『儒学の目的と宋儒（慶暦至慶元百六十年間）の活動』により文学博士。二〇（一九四五）年に退官。その後、国立国会図書館支部静嘉堂文庫長、都留文科大学長等。三五年に『大漢和辞典』刊行完結。四〇年に文化勲章。五一年に勲一等瑞宝章。主要著書は『諸橋轍次著作集』参照。



43　読書別無法 只要耐子細　諸橋轍次

絹本・額装　昭和 37（1962）年

『大漢和辞典』全巻完結の翌々年に揮毫・額装され、教育大附属図書館の学生閲覧室に掲げられていた書。止軒は諸橋の号。典拠の「朱熹読書法語」とは『朱子読書法』（『四庫全書』第 709 冊）と見られ、「本を読むのに特別な方法などない。ただ倦むことなく細やかに読むだけだ。」の意（人文社会系教授小松建男・准教授稀代麻也子両氏の御教示を得た）。諸橋は「凡て学問が進歩する為には一時分化分析の過程を通ることは必然だ。併し其の学問が生きて人世に役立つ為には統合ある姿を取らねばならぬ。」（「国学としての漢学」『諸橋轍次著作集』10。初出は 1935 年）と述べ、統合的にものごとをとらえる手段として読書を勧めた。現代に通じる諸橋の卓見である。



参考 12　東京文理科大学附属図書館の図書閲覧室

（『卒業記念』（卒業アルバム）　昭和 13（1938）年）

表２　東京文理科大学・東京教育大学附属図書館の図書分類法（昭和 8-47（1933-72）年）

類	和漢書記号	洋書記号	大分類	中分類
1	イ	A	一般書	図書学及図書館，書誌・書目，辞書，事彙・百科全書・年鑑・索引，類書，叢書・全集，随筆及雑書，学会・会報・博物館，一般雑誌・新聞
2	ロ	B	哲学	哲学一般，西洋哲学史及伝記，形而上学，認識論・論理学及言語哲学，自然哲学，文化哲学，心理学，倫理学，美学，東洋哲学，支那哲学 [→中国哲学]，印度哲学
3	ハ	C	宗教・神祇	宗教一般，神祇，仏教，キリスト教，道教及其他宗教
4	ホ	D	教育	教育一般，教育史伝，教育学，学校教育及校外教育，教育法，教育制度・行政及学校管理
5	ヘ	D’	教科書	文部省編纂小学校用教科書 [→文部省編纂]，修身及公民科，国語及漢文，歴史・地理，数学，自然科学，法制経済 [(社会科)]，教育学・教授法，実業 [(職業科)]，図画，手工・作業，作法・家事・裁縫・手芸，音楽・唱歌，体操，台湾・朝鮮・満洲・支那 [→中国] 等，雑
6	チ	E	語学	言語一般，言語学及言語学史，国語，[朝鮮語]，[アイヌ語]，[台湾・樺太土語]，支那語，満蒙語・西蔵語，東洋諸国語，英語，独逸語 [→ドイツ語]，仏蘭西語 [→フランス語]，其他西洋諸国語 [→其他諸国語]，演説法・速記法
7	ル	F	文学	文学一般，国文学，[朝鮮文学]，漢文学 [→中国文学]，英文学 [→英米文学]，ドイツ文学，フランス文学，其他外国文学，少年文学
8	カ	G	芸術	芸術一般，書画，美術工芸，彫塑，景園，音楽 [・歌劇]，演芸及演劇
9	ヨ	H	歴史	歴史一般，日本史，朝鮮史，東洋史一般，支那史 [→中国史]，満洲・蒙古史，東洋諸国史，西洋史，各国史 [→西洋諸国史]，[その他諸国史]，世界史，考古学 [・先史学]
10	タ	J	伝記	伝記一般，日本人伝，朝鮮人伝，支那人伝 [→中国人伝]，其他諸外国人伝記
11	ネ	K	地理	地理一般，地文学 [→自然地理学]，人文地理学，日本，支那 [→中国]，アジア，ヨーロッパ，アフリカ，北アメリカ，南アメリカ，大洋洲，極地，外国地誌
12	ム	L	法律	法律一般，法制史及法制史料，憲法，行政法，刑法，民法，商法，手続法，国際公法，国際私法，其他諸法，法典・法令 (判決録 [・立法資料])，国際刊行物及条約
13	ウ	M	政治・行政	政治一般，政治学，議会及選挙，政党，行政学，国際政策・外交，国際連盟 [・国際連合]，外国政治
14	オ	N	経済・財政	経済一般，経済史及経済学史伝，経済各論，各国経済事情，財政一般，財政史，財政各論
15	ヤ	P	社会	社会一般，社会学及社会学史，社会理論，社会問題及政策，社会事業，風俗及民俗学，[民族学]
16	ケ	Q	統計	統計一般，統計学及統計学史，日本統計，世界統計及諸外国統計
17	コ	R	数学	数学一般，和漢算数，算術及代数 [学]，解析 [学]，幾何 [学]，応用数学
18	テ	S	自然科学	自然科学一般，宇宙物理 [学]・地球物理 [学](天文及暦算)，理化学一般，物理 [学]，化学，地質学及鉱物学，生物学，動物学，植物学，人類学・人種学
19	ア	T	工学	工学一般，土木工学，機械工学・船舶工学 [・航空工学]，電気工学 [・通信工学・電子工学]，採鉱冶金学，建築学，[原子工学]
20	サ	U	医学	医学一般，解剖学，生理学，薬物学 [→薬学]・毒物学・法医学，血清学・衛生学・公衆衛生・流行病学，臨床医学，和漢医学
21	キ	V	軍事	軍事一般，史伝，兵法・武器・武芸・其他，陸軍，海軍，空軍，赤十字，外国兵制・軍備其他
22	ヒ	W	産業	産業一般，農業 [→農林水産業]，工業，商業，[会計・簿記・経営]
23	モ	X	交通	交通一般，水運，陸運，空運，通信
24	セ	Y	家政	家政一般，家庭経済，日用理化学，裁縫・手芸，[衣服整理・洗濯]，美容術，料理，住居及家具，家庭衛生及育児
25	ス	Z	諸芸・遊技	総記，礼法・諸芸，[運動・] 競技，娯楽

東京教育大学附属図書館編『和漢図書分類表』による補訂は [　] 内に示し、改称されたものは [→　] により示した。

諸橋館長時代の昭和８（1933）年には文理科大附属図書館が竣工し、昭和２（1927）年から使用する西館内より移転した。管理運営のための図書館商議員もこの年に設置された。また、当時の文理科大が有する知の大系が反映されたと考えられる独自の図書分類法により、翌９（1934）年に『和漢書分類目録』および ***A Classified Catalogue of Books in European Languages in the Library of the Tokyo University of Literature and Science.***（『洋書分類目録』）計７冊（昭和８年３月現在）が公刊された。

参考 13　閉学直前の東京教育大学附属図書館

（『東京教育大学概要』昭和 52 年度 閉学記念特集）

文理科大附属図書館の戦災からの復興は、能勢館長のもとで行われた。修理・再開された附属図書館は、そのまま教育大に引き継がれた。しかし、時計台は空襲時に止まったまま、昭和 53（1978）年に閉学を迎えた。その蔵書は本学に移管され、現在も活用されている。

能勢朝次（一八九四―一九五五）

東京文理科大学附属図書館三代館長（一九四五―四九）

東京教育大学附属図書館初代館長（一九四九～四九）

京都府北桑田郡山国村（現 京都市）生まれ。専門は国文学。大正七（一九一八）年に東京高等師範学校国語漢文科卒業。一二年に京都帝国大学（現 国立大学法人京都大学）文学部文学科卒業。昭和三（一九二八）年に同 大学院退学。同大学講師を経て七年に東京高等師範学校教授、東京文理科大学講師、助教授、教授、東京教育大学教授。この間、著書『能楽源流考』により一五年に日本学士院恩賜賞、二二年に文学博士。二九年に奈良学芸大学（現 国立大学法人奈良教育大学）学長、東京教育大学東京文理科大学名誉教授。三〇年に従三位勲二等瑞宝章。主要著書は『能勢朝次著作集』参照。

44　謡本 二十七番　観世身愛写　慶長 8-11（1603-06）年

和歌・俳句・連歌、そして能楽研究で著名な能勢朝次は、能楽の謡本を各種のテキスト・周辺資料から検討し、学位論文『能楽源流考』をはじめとする成果を公表した。本展ではその業績にちなみ、貴重書に指定される肥前（佐賀県）唐津藩主小笠原家旧蔵、二重の木箱入りの謡本を取り上げる。「老松」「実盛」「松風」「紅葉狩」「千寿重衡」「杜若」「百万」「錦木」「夕顔」「田村」「朝長」「定家」「湯谷」「雲林院」「卒都婆小町」「女郎花」「藤戸」「西行桜」「三輪」「宇治頼政」「兼平」「関寺小町」「江口」「野乃宮」「源氏供養」「摂待」「融」の 27 冊がある。

開拓者よもやま話＊第六講

守り継がれる前身校の知 ―被災図書物語―

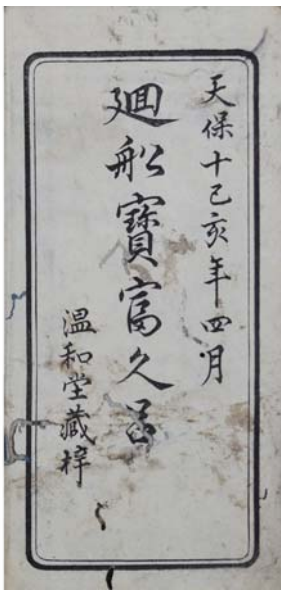
附属図書館の蔵書は、本展で見てきたように、知の開拓者たちの最前線での活躍を、同時代には支え、現代においては振り返らせてくれる重要な知の遺産である。しかし、災害に対してはなす術もない。本学附属図書館で、平成二三（二〇一一）年三月一一日の東日本大震災によって、筑波キャンパス内の建物および蔵書の約六割にあたる約一五〇万冊が被害を受けたことは記憶に新しい。

東京高等師範学校図書館・東京文理科大学附属図書館もまた、惜しくも被災した経験がある。大正一二（一九二三）年九月一日の関東大震災では大きな被害はなかったが、同年一一月一六日に化学実験室からの失火による火災で類焼し、和漢書五三四四冊・洋書三一四二冊、計八四八六冊を焼失した。昭和二〇（一九四五）年五月二五日には空襲で直撃弾を受けた。幸い、本館の図書約二四〇〇冊は諸橋轍次館長の仲介で静嘉堂文庫に、倫理学・哲学・地質学など教室配架の図書は山梨・長野・埼玉などに疎開していたが、和漢書三万六六七三冊・洋書一万九九二冊、計四万七六六五冊を焼失した。そのなかには東京高等師範学校教授（道徳教育）佐々木秀一（一八七〇―一九四五）寄贈の「佐々木文庫」全二五〇五冊、受入作業中であったと見られる「為藤氏寄贈」の約四〇〇冊、「鈴木氏寄贈」の約一三〇〇冊も含まれていたと記録されている。

ところで、このとき猛火から蔵書を守るために、図書館職員や学生寮寄宿生らが尽力したと伝えられている。燃えさかる館内に上衣を濡らして飛び込み、窓から運動場の水たまりに蔵書を投げ込んだらしい。資料45・46に見られるような焼損・汚損はその救出活動の「生き証人」である。

本学附属図書館でも、東日本大震災のさいに、図書館職員のみならず、のべ四七五人もの教職員・学生のボランティアが復旧作業に参加し、早期の再開を可能にさせた。私たちは、東京教育大学から引き継いだ貴重書を含む本学附属図書館の蔵書を大切に守り、次の世代に伝えていくこともまたミッションにしていかなければならない。

45　修学院離宮細図・修学院御山荘御幸之儀
江戸時代



46　廻船宝冨久呂　奥村贈貝
温和堂　天保10（1839）年刊

資料編

筑波大学附属図書館の歩み

昭和 48 年度	(1973.10)	筑波大学開学・附属図書館設置
昭和 49 年度	(1974.4)	図書館課発足
	(1974.7)	体育・芸術図書館開館
	(1975.2)	館報「つくばね」創刊
	(1975.3)	東京教育大学蔵書移送開始（昭和 53 年 3 月完了）
昭和 50 年度	(1975.4)	事務組織改組〔1 部 2 課（管理課、運用課）〕
昭和 52 年度	(1977.11)	「筑波大学図書館システムの構想」刊行
	(1978.1)	医学図書館開館
昭和 53 年度	(1979.1)	「筑波大学図書館システム実施計画案」刊行
	(1979.3)	「筑波大学附属図書館情報処理システム〔TULIPS〕」刊行
昭和 54 年度	(1979.4)	学術情報課新設〔1 部 3 課（管理課、運用課、学術情報課）〕
	(1979.5)	TULIPS による電算処理開始
	(1979.6)	「筑波大学収書速報」創刊（以降平成 2 年度まで刊行）
	(1979.10)	中央図書館開館・貸出業務の電算処理開始
	(1980.1)	「新刊和書選書速報」創刊（以降昭和 63 年度まで刊行）
昭和 55 年度	(1980.11)	開学 7 周年を記念して稀本 51 点を展示公開
	(1981.3)	「筑波大学附属図書館増加図書目録 昭和 53/54 年版」刊行（以降昭和 63 年度まで刊行）
昭和 56 年度	(1981.10)	図書館内オンライン蔵書検索サービス開始
昭和 57 年度	(1982.12)	学内端末からのオンライン蔵書検索サービス開始
昭和 59 年度	(1984.7)	TULIPS が諸業務を統括したトータルシステムとして稼働
昭和 60 年度	(1985.10)	中央図書館第 1 回日本図書館協会建築賞（優秀賞）受賞
昭和 63 年度	(1988.4)	附属図書館利用規程制定。情報管理課、情報サービス課、情報システム課に改称
	(1988.8)	学術情報センター目録所在情報サービスに接続
	(1988.9)	教育用計算機システムを中央図書館、医学図書館に導入
平成元年度	(1989.6)	大塚図書館開館
	(1989.8)	学術情報センター総合目録データベースに登録開始
	(1989.9)	中央図書館開館 10 周年記念特別展示会を開催
平成 2 年度	(1991.3)	図書館将来計画委員会最終答申
平成 3 年度	(1991.11)	筑波研究学園都市内の研究者等に対する図書貸出の実施
	(1992.2)	図書館専用計算機の導入
平成 4 年度	(1992.4)	日曜日開館実施・一般学外者に対する図書貸出の一部実施
	(1992.5)	土曜日開館実施
	(1992.6)	学術情報センター ILL システムに接続、業務開始
	(1992.11)	「コメニウス文庫」展を開催
平成 5 年度	(1993.10)	インターネットによる TULIPS 蔵書検索サービス開始
平成 6 年度	(1995.3)	中央図書館新館（増築）竣工（6 月竣工披露式）
平成 7 年度	(1995.6)	附属図書館ボランティア導入
平成 9 年度	(1997.6)	平成 9 年度国立大学図書館協議会賞受賞 (「大学図書館ボランティアの導入」)
	(1997.10)	放送大学茨城地域学習センターの学生に対する図書貸出の実施
	(1998.1)	電子図書館システム導入
平成 11 年度	(1999.4)	祝日法に規定する休日開館実施
平成 13 年度	(2001.4)	教育用計算機システムを体育・芸術図書館に導入
	(2001.5)	土・日・祝日開館時の貸出サービス試行（翌年 4 月より実施）
平成 14 年度	(2002.10)	図書館情報大学との統合、図書館情報学図書館開館
平成 15 年度	(2004.3)	学外文献複写申込オンラインサービス開始
平成 16 年度	(2004.4)	法人化に伴い事務組織改組（附属図書館情報管理課、情報サービス課の 2 課体制）
	(2004.11)	土・日・祝日開館時間の延長の試行（翌年 4 月より実施）
平成 17 年度	(2005.4)	大塚図書館（秋葉原地区）開館
	(2005.4)	一般学外者に対する図書貸出の実施
	(2005.5)	研究開発室の設置
	(2006.3)	つくばリポジトリ公開
平成 18 年度	(2007.3)	学協会著作権ポリシーデータベース (SCPJ:Society Copyright Policies in Japan) 公開
平成 19 年度	(2007.5)	e-DDS サービス開始（教員対象）
	(2008.3)	中央図書館エントランスにコーヒーショップ開店
平成 20 年度	(2008.4)	医学図書館において土・日・祝日の開館時間を延長
	(2008.7)	中央図書館耐震改修工事開始（～平成 23 年 1 月竣工）

平成 21 年度	(2009.4)	広報誌「Prism」創刊
	(2009.6)	平成 21 年度国立大学図書館協会賞を受賞（プロモーションビデオ制作 WG）
	(2009.9)	「筑波大学附属図書館年報」創刊
	(2009.9)	中央図書館新館 2 階スタディスペースオープン
	(2010.2)	電子図書館システム更新 ディスカバリーサービス（次世代 OPAC）導入
	(2010.3)	東京キャンパス大塚地区校舎改築に伴い、大塚図書館が仮校舎へ移転
	(2010.3)	EJ ／ DB リモートアクセスサービス「Tulips-Warp」開始
平成 22 年度	(2010.4)	図書館情報学図書館においてラーニングコモンズを開始
	(2011.3)	【東日本大震災】書架倒壊・本落下等により閉館（3/12-3/28）
	(2011.3)	Twitter による情報発信開始（@tsukubauniv_lib）
平成 23 年度	(2011.5)	【東日本大震災】体育・芸術図書館を除き、復旧作業終了
	(2011.9)	大塚図書館リニューアル・オープン
	(2011.9)	中央図書館ラーニング・スクエアオープン
	(2011.10)	中央図書館ラーニングアドバイザーによる活動開始
	(2012.1)	体育・芸術図書館震災復旧工事開始（～ 3 月竣工）
	(2012.2)	『筑波大学附属図書館の使命と目標』を制定
平成 24 年度	(2012.10)	ライティング支援セミナー「知識と言葉をめぐる冒険」を開始
	(2012.11)	中央図書館で開館時間延長試行（月～金 8 時 30 分開館、土・日・祝日 20 時まで開館）
	(2012.11)	TSA（つくばサイエンスアクティビティ）公開
	(2012.12)	図書館情報学図書館で年末年始の時間外利用試行
	(2013.1)	中央図書館で開館時間延長試行（月～金 24 時まで開館）
平成 25 年度	(2013.9)	医学図書館耐震改修工事開始

歴代図書館長一覧

	名前	期間			備考
高等師範学校・東京高等師範学校	三宅米吉	明治 32 年 6 月 30 日	～	明治 36 年 9 月 6 日	図書係事務監督
	三宅米吉	明治 36 年 9 月 7 日	～	明治 44 年 4 月 29 日	主幹
	松井簡治	明治 44 年 4 月 29 日	～	昭和 4 年 3 月 31 日	主幹
東京文理科大学	松井簡治	昭和 4 年 4 月 1 日	～	昭和 7 年 3 月 3 日	
	諸橋轍次	昭和 7 年 3 月 4 日	～	昭和 20 年 10 月 3 日	
	能勢朝次	昭和 20 年 10 月 4 日	～	昭和 24 年 5 月 31 日	
東京教育大学	能勢朝次	昭和 24 年 6 月 1 日	～	昭和 24 年 8 月 30 日	
	下村寅太郎	昭和 24 年 8 月 31 日	～	昭和 29 年 7 月 15 日	
	中西清	昭和 29 年 7 月 16 日	～	昭和 31 年 3 月 31 日	
	熊沢龍	昭和 31 年 4 月 1 日	～	昭和 33 年 3 月 31 日	
	熊沢龍	昭和 33 年 4 月 1 日	～	昭和 33 年 4 月 30 日	事務取扱
	熊沢龍	昭和 33 年 5 月 1 日	～	昭和 35 年 4 月 30 日	
	肥後和男	昭和 35 年 5 月 1 日	～	昭和 38 年 3 月 31 日	
	山崎宏	昭和 38 年 4 月 1 日	～	昭和 40 年 3 月 31 日	
	平塚直秀	昭和 40 年 4 月 1 日	～	昭和 42 年 3 月 31 日	
	酒井忠夫	昭和 42 年 4 月 1 日	～	昭和 44 年 3 月 31 日	
	宮島龍興	昭和 44 年 4 月 1 日	～	昭和 44 年 4 月 27 日	事務取扱
	酒井忠夫	昭和 44 年 4 月 28 日	～	昭和 46 年 4 月 27 日	
	橋本重治	昭和 46 年 4 月 28 日	～	昭和 47 年 3 月 31 日	
	武藤聡雄	昭和 47 年 4 月 1 日	～	昭和 51 年 3 月 31 日	
	西谷三四郎	昭和 51 年 4 月 1 日	～	昭和 53 年 3 月 31 日	
筑波大学	三輪知雄	昭和 48 年 10 月 1 日	～	昭和 49 年 5 月 1 日	事務取扱
	酒井忠夫	昭和 49 年 5 月 1 日	～	昭和 50 年 4 月 1 日	
	大饗茂	昭和 50 年 4 月 2 日	～	昭和 52 年 4 月 1 日	
	高橋進	昭和 52 年 4 月 2 日	～	昭和 54 年 4 月 1 日	
	宮島龍興	昭和 54 年 4 月 2 日	～	昭和 54 年 6 月 9 日	事務取扱
	岡本敬二	昭和 54 年 6 月 9 日	～	昭和 56 年 4 月 1 日	
	高橋進	昭和 56 年 4 月 2 日	～	昭和 56 年 5 月 1 日	事務取扱
	郡司利男	昭和 56 年 5 月 1 日	～	昭和 60 年 3 月 31 日	
	松浦悦之	昭和 60 年 4 月 1 日	～	昭和 60 年 4 月 3 日	事務取扱
	升田公三	昭和 60 年 4 月 3 日	～	昭和 62 年 6 月 8 日	
	柳沼重剛	昭和 62 年 6 月 9 日	～	平成元年 6 月 8 日	
	小川圭治	平成元年 6 月 9 日	～	平成 3 年 3 月 31 日	
	新井敏弘	平成 3 年 4 月 1 日	～	平成 5 年 3 月 31 日	
	北原保雄	平成 5 年 4 月 1 日	～	平成 9 年 3 月 31 日	2 期
	斎藤武生	平成 9 年 4 月 1 日	～	平成 11 年 3 月 31 日	
	板橋秀一	平成 11 年 4 月 1 日	～	平成 13 年 3 月 31 日	
	山内芳文	平成 13 年 4 月 1 日	～	平成 15 年 3 月 31 日	
	林史典	平成 15 年 4 月 1 日	～	平成 16 年 3 月 31 日	
	植松貞夫	平成 16 年 4 月 1 日	～	平成 22 年 3 月 31 日	3 期
	波多野澄雄	平成 22 年 4 月 1 日	～	平成 24 年 3 月 31 日	
	中山伸一	平成 24 年 4 月 1 日	～		

附属図書館特別展・企画展一覧

開催年度	特別展／企画展	名称	開催期間	共催部局	入場者数
平成 7 年度	特別展	天正少年使節と『原マルチノの演説』	6/1(木)-6/8(木)		821
平成 8 年度	特別展	宇野文庫展	9/19(木)-10/11(金)		229
平成 8 年度	特別展	幕末・明治の生活と教育 —写真・幻灯・錦絵・教科書—	10/23(水)-11/10(日)		1,681
平成 9 年度	特別展	明治のいぶき　黎明期の近代教育 —幻灯・錦絵・教科書—	8/4(月)-8/9(土)	※ 1	3,822
平成 10 年度	特別展	近代教育学の源流 —コメニウスからフレーベルまで—	9/7(月)-10/16(金)	教育学系	584
平成 11 年度	特別展	身体と遊戯へのまなざし—日本近代体育黎明期の体操伝習所（明治 11 ～ 19 年）—	12/6(月)-12/17(金)	体育科学系	610
平成 12 年度	特別展	筑波大学附属図書館所蔵　日本美術の名品—石山寺一切経、狩野探幽・尚信の新出屏風絵と歴聖大儒像—	5/22(月)-6/9(金)	芸術学系	4,333
平成 13 年度	特別展	日本古代の学問と萬葉集	10/22(月)-11/2(金)	哲学・思想学系 文芸・言語学系	880
平成 14 年度	特別展	「学問の神」をささえた人びと —北野天満宮の文書と記録—	12/2(月)-12/18(水)	歴史・人類学系	872
平成 15 年度	特別展	筑波大学開学 30 周年（創基 131 年）記念附属図書館貴重図書特別展	9/29(月)-10/10(金)		1,243
平成 16 年度	特別展	オリエントの歴史と文化 —古代学の形成と展開—	10/25(月)-11/15(金)	人文社会科学研究科	1,256
平成 17 年度	特別展	江戸前期の湯島聖堂—筑波大学資料による復元研究成果公開—	10/8(土)-10/30(日)	芸術専門学群	1,780
平成 18 年度	企画展	中国三大奇書の成立と受容—『三国志』『水滸伝』『西遊記』は どのように読まれ、描かれたか—	10/2(月)-10/27(金)		1,800
平成 19 年度	企画展	古地図の世界—世界図とその版木—	10/1(月)-10/26(金)		1,708
平成 21 年度	特別展	日光　描かれたご威光 —東照宮のまつりと将軍の社参—	10/5(月)-10/30(金)	歴史・人類学専攻	1,334
平成 21 年度	特別展	筑波大学附属図書館所蔵　連歌俳諧貴重書展	10/19(月)-10/30(金)	人文社会科学研究科	※ 2
平成 22 年度	特別展	慈雲尊者と悉曇学—自筆本『法華陀羅尼略解』と「梵学津梁」の世界—	10/4(月)-10/29(金)	人文社会科学研究科	1,042
平成 23 年度	特別展	日本人のよんだ漢籍 —貴重書と和刻本と—	9/22(木)-10-21(金)	人文社会科学研究科	814
平成 24 年度	特別展	明治時代に礼法はいかにして伝えられたか—出版メディアを中心に—	10/1(月)-10/31(水)	図書館情報メディア系	1,397

各年度の展示内容は、電子展示 http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/portal/exhibition.php から公開している。

※ 1　筑波大学主催で、丸善・日本橋店 4F ギャラリーにて開催した。

※ 2　特別展「日光　描かれたご威光」と同時開催のため、入場者数はカウントしていない。

附属図書館所蔵　文庫・コレクション一覧

No.	名称	受入年月	旧蔵者	受入冊数	備考
1	福富文庫	明治 27(1894) 年 11 月	福富孝季	62	東京高等師範学校教授（教育学）
2	日高文庫	明治 29(1896) 年 5 月	日高真実	1,234	高等師範学校教授（教育学・哲学）
3	中村文庫	明治 42(1909) 年 3 月		106	
4	那珂文庫	明治 42(1909) 年 9 月	那珂通世	2,000	高等師範学校教授（東洋史）
5	南摩文庫	大正 4(1915) 年 5 月	南摩綱紀	936	東京高等師範学校教授（中国哲学）
6	加藤文庫	大正 4(1915) 年 11 月	加藤鉄之助	276	東京高等師範学校教授（地理学）
7	大久保文庫	大正 5(1916) 年 3 月		143	大久保永氏寄贈、植物研究室貸付
8	ウッド文庫	大正 5(1916) 年 10 月	アウガスタス・ウッド (Augustus Wood)	802	東京高等師範学校講師 (英語) 大正 12 年の火災で多くを焼失
9	小泉文庫	大正 6(1917) 年 1 月	小泉又一	218	東京高等師範学校教授（教育学）
10	千本文庫	大正 8(1919) 年 6 月	千本福隆	192	東京高等師範学校教授（数学）
11	野田文庫	大正 10(1921) 年 1 月、大正 11(1922) 年 10 月	野田貞	25	東京高等師範学校教授（物理学）
12	林文庫	大正 11(1922) 年 12 月	林泰輔	1,903	東京高等師範学校教授（漢学）
13	中澤文庫	大正 12(1923) 年 6 月	中澤久雄	253	東京高等師範学校文科生徒
14	斎田文庫	大正 13(1924) 年 4 月	斎田功太郎	396	東京高等師範学校教授（植物学）
15	国枝文庫	大正 13(1924) 年 5 月	国枝元治	13	東京高等師範学校教授（数学）
16	土居文庫	大正 13(1924) 年 7 月	土居光知	58	東京高等師範学校教授（英文学・日本文学）
17	波多野文庫	大正 13(1924) 年 7 月	波多野貞之助	459	東京高等師範学校教授（教育学）
18	磯田文庫	大正 13(1924) 年 10 月	磯田良	221	東京高等師範学校教授（西洋史）
19	内野文庫	大正 15(1926) 年 2 月	内野臺嶺	158	東京文理科大学教授（中国哲学・中国文学）
20	中山文庫	大正 15(1926) 年 9 月	中山久四郎	6	東京文理科大学教授（東洋史）
21	後藤文庫	昭和 5(1930) 年 3 月	後藤牧太	133	東京高等師範学校教授（物理学） 現存なし
22	補永文庫	昭和 8(1933) 年 11 月	補永茂助	314	東京高等師範学校助教授（倫理学）
23	三宅文庫	昭和 9(1934) 年 3 月	三宅米吉	5,043	東京文理科大学長 (歴史学・考古学)
24	丘文庫	昭和 12(1937) 年 7 月	丘浅次郎	1,433	東京高等師範学校教授（動物学） 抜刷を多く含む
25	宮木文庫	昭和 13(1938) 年 7 月	宮木宥弌	5,722	僧侶、明治維新前後の寺子屋や学校の教科書類
26	神保文庫	昭和 14(1939) 年 9 月	神保格	328	東京文理科大学教授（言語学） 戦災で大部分を焼失
27	岡倉文庫	昭和 15(1940) 年 9 月	岡倉由三郎	2,417	東京高等師範学校教授（英語・英文学）
28	石川文庫	昭和 15(1940) 年 9 月	石川林四郎	935	東京文理科大学教授（英文学）
29	各務文庫	昭和 17(1942) 年 2 月	各務謙吉	497	東京海上保険会社会長
30	佐々木文庫	昭和 18(1943) 年 7 月	佐々木秀一	2,505	東京高等師範学校教授（教育学） 戦災で全冊焼失

No.	名称	受入年月	旧蔵者	受入冊数	備考
31	穂積文庫	昭和 27(1952) 年 3 月	穂積陳重・重遠	4,023	法学者・最高裁判事
32	乙竹文庫	昭和 30(1955) 年 2 月	乙竹岩造	1,457	東京文理科大学教授（教育学）
33	川本文庫	昭和 36(1961) 年 12 月	川本宇之介	60	東京教育大学教育学部特設教員養成部講師
34	斎藤文庫	昭和 37(1962) 年 8 月	斎藤道彦	313	卒業生の親族、中国文学・漢詩他
35	閉学記念文庫	昭和 42(1967) 年 5 月		132	東京文理科大学の閉学記念に創設
36	コメニウス文庫	昭和 42(1967) 年 6 月	梅根悟	236	東京教育大学教授（教育学）
37	湯本文庫	昭和 42(1967) 年 11 月		67	東京高等師範学校教授 湯本武比古（教育学）の旧蔵書か
38	心理学・精神医学書コレクション	昭和 53(1978) 年度		1,458	教育、社会、産業、実験、異常性格等の各心理学、行動理論及び精神病学史の各分野の資料
39	シュタイン・コレクション	昭和 54(1979) 年度		3,055	ドイツの哲学者ルートヴィヒ・シュタインと息子アルトゥールの旧蔵書
40	英国議会資料	昭和 54(1979) 年度		1,000	19 世紀の英国議会に設置された特別委員会、王立委員会の立法のための調査報告書、証言録、資料からなるコレクション
41	ベッソン・コレクション	昭和 54(1979) 年度		377	パリ在住のマックス・ベッソン氏が蒐集した日欧関係刊行書
42	バウハウス叢書と展覧会目録コレクション	昭和 56(1981) 年度		17	ドイツ工芸学校「バウハウス」による叢書と、宣言文を含む展覧会目録
43	笠木文庫	昭和 56(1981) 年 3 月	笠木二郎	2,891	国立国会図書館司書監
44	元メキシコ大統領ポルフィリオ・ディアス文庫	昭和 57(1982) 年度		486	ポルフィリオ・ディアスが亡命の際に官邸に残していった図書や公文書、後に参考資料として加えられた文献
45	国家社会主義法(1933-1945)	昭和 58(1983) 年度		433	国家社会主義の理論を展開した図書及びパンフレットのコレクション
46	フンボルト、新大陸の赤道地方への旅行記	昭和 59(1984) 年度		35	アレクサンダー・フォン・フンボルトが、1799 年から 1804 年にかけて南米赤道地方においておこなった旅行の記録
47	フランス教育史コレクション	昭和 62(1987) 年度		365	18 世紀から 20 世紀に出版されたフランス教育関係資料
48	ロシア・スラブ言語学集成	昭和 62(1987) 年度		318	ロシア・スラブ言語学の基本図書
49	学校一覧	昭和 63(1988) 年 3 月～平成 20(2008) 年 6 月		783	戦前期の教育機関が毎年刊行した各学校の概要を記録した冊子のコレクション
50	明治以降教科書	昭和 63(1988) 年 11 月		11,304	明治以降から戦前までの初等・中等教育用教科書
51	旧農学部教員養成関係資料	昭和 63(1988) 年 11 月	東京教育大学農学部	699	旧農学部から移管した、明治から戦前までの農業教員養成の教科書類
52	イギリス法制史コレクション	平成 3(1991) 年度		353	15 世紀以降の英国の法令集、判例集、研究書等から成るコレクション
53	伊藤文庫	平成 3(1991) 年	伊藤正己	3,080	最高裁判所判事、東京大学名誉教授
54	中国古典戯曲小説資料（第 1 期）	平成 4(1992) 年		3,078	中国の有名な戯曲小説と民国以来の小説戯曲関係の論著
55	竹内文庫	平成 8(1996) 年 3 月	竹内昭夫	3,279	筑波大学教授（法学）、東京大学名誉教授
56	宇野文庫	平成 9(1997) 年 2 月	宇野弘蔵	1,400	マルクス経済学者、手稿、未刊行の講演原稿、ノート、書込みのある図書を含む
57	中国古典戯曲小説資料（第 2 期）	平成 11(1999) 年		5,682	中国の有名な戯曲小説と民国以来の小説戯曲関係の論著

No.	名称	受入年月	旧蔵者	受入冊数	備考
58	馬渕文庫	平成 15(2003) 年 3 月	馬渕和夫	171	筑波大学名誉教授 (国語学)
59	東京教育大学教育課程文庫 (教科書)	平成 14(2002) 年 6 月～ 16(2004) 年 3 月	東京文理科大学教育学研究室	18,738	終戦後 GHQ から文部省に寄贈された教科書を母体とし、米国の教育書・教育学書や日本の教科書・学習指導要領などを追加して文庫としたもの
60	東京教育大学教育課程文庫 (一般)	平成 16(2004) 年 3 月	東京文理科大学教育学研究室	723	
61	ヘファナン文庫	平成 16(2004) 年 3 月	東京教育大学教育学研究室	221	CIE(連合軍総司令部民間情報局) 小学部長 Helen Heffernan 女史から寄贈された米国教育関係資料
62	IFEL 文庫	平成 16(2004) 年 3 月	東京教育大学教育学研究室	1,931	昭和 27 年東京教育大学を会場に IFEL（The Institute for Education Leadership：教育指導者講習会）が催された時に使用した教材
63	文部科学省旧蔵教育政策関係コレクション	平成 19(2007) 年 12 月～ 20(2008) 年 1 月	文部科学省	648	文部科学省で収集保管されていた戦後の教育改革に関する資料から成るコレクション
64	東京オリンピック関係資料	平成 21(2009) 年度	旧東京教育大学体育学部	304	1964 年開催の東京オリンピック関係史料
65	鈴木虎雄文庫	平成 22(2010) 年 3 月	鈴木虎雄	612	中国文学者で東京高等師範学校教授・京都帝国大学教授であった鈴木虎雄の関係資料
66	桜庭文庫	平成 22(2010) 年 9 月	桜庭武	241	東京高等師範学校教授（柔道）
67	二宮文庫	平成 24(2012) 年度受入開始	二宮宏之	8,000	東京外国語大学名誉教授 (西洋史学) 受入冊数は予定冊数
68	渡邉一郎文庫	平成 24(2012) 年 10 月～ 12 月	渡邉一郎	365	筑波大学名誉教授 (武道論)

No.	名称	所蔵冊数	備考
69	石清水八幡宮文書	30	京都の石清水八幡宮関係の文書・記録群で、多くの文書の発給者及び宛先は祠官田中家のもの
70	漢籍大叢書	32,385	主として辛亥革命 (1911 年) 以降の漢籍大叢書
71	北野神社文書	470	京都の北野神社関係の文書・記録群で、大半はかつて北野神社の社家のひとつであった松梅院の旧蔵書
72	旧東亜研究所第六調査委員会収集文書	1,021	昭和 13 年に設立され第二次世界大戦終結後に解散した東亜研究所第六調査委員会が収集した近代中国文書
73	雑文書	56	一乗院・東寺・清水寺成就院・多田神社・祇園宝寿院などを含む京都の寺社文書
74	昌平坂学問所関係文書	315	寛政 12 年から文久 2 年に至るまでの学問所の日記、大学頭林述斎、儒者佐藤一斎らの書状、学問所関係の冊子・一枚物、学問所蔵書の押切帳など
75	大徳寺文書	8	京都の大徳寺関係の文書・記録
76	中国大叢書	26,220	「四庫全書」など中国で出版された叢書で大部をなすもの
77	長福寺文書	2	京都の長福寺関係の文書・記録
78	筑波大学出版会図書	62	筑波大学の研究成果を出版物として広く社会に発信するため、平成 19 年 7 月に設立され、幅広い学問分野の図書を年に数冊刊行
79	闘病記	219	病気になった人や看病をした人などの体験や思いを綴った記録を集めたコレクション

※ No. は受入年月順による。受入冊数は受入の際の冊数であり、現在の所蔵冊数とは異なる。また、火災消失等の理由で現存しない文庫を含んでいる。ただし、No.69 ～ 79 の文書・叢書等は、名称の五十音順による。平成 25 年 10 月現在。

※各文庫・コレクションの現在の所蔵目録は、筑波大学附属図書館所蔵 文庫・コレクション http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/pub/collection-syokai.html から公開している。

筑波大学附属図書館研究開発室について

筑波大学附属図書館研究開発室は、平成17（2005）年5月に設置された。植松貞夫附属図書館長（当時）は『筑波大学附属図書館研究開発室年次報告　平成17年度』の「創刊にあたって」の中で、設置の趣旨ならびに経緯と、研究開発室の当面の課題として（1）電子図書館機能の高次化、（2）図書館サービスに関連する職員の資質向上、（3）図書館利用者とくに学生・院生の図書館リテラシー向上、（4）資料保存と公開のあり方に関する調査・研究・開発の四本柱を設定して活動を開始した旨を述べている。

研究開発室は、これ以来、この四本柱を基礎としたプロジェクト制によって活動しているが、研究開発に関する長期的な取り組みの必要性を考慮して、必要に応じて時代の進展に即したプロジェクト・サブプロジェクトを設け、具体的な活動は年度単位で計画・実施する形をとってきた。また、このような方針から、プロジェクトを担当する室員も協力者である図書館員も適宜交代してきた。最近の活動状況を表すものとして、以下に平成24年度及び平成25年度の研究開発室員ならびにプロジェクト一覧を示す。

＜平成24・25年度研究開発室員一覧＞　＊年度名の記載のある室員は当該年度のみの就任である

福井幸男（研究開発室長・附属図書館副館長・システム情報系）	佐藤聡（システム情報系・学術情報メディアセンター）
関川雅彦（附属図書館副館長･平成24年度）	松井敏也（芸術系）
加藤信哉（附属図書館副館長･平成25年度）	逸村裕（図書館情報メディア系・知的コミュニティ基盤研究センター）
島田康行（人文社会系・アドミッションセンター長）	歳森敦（図書館情報メディア系）
山澤学（人文社会系）	宇陀則彦（図書館情報メディア系）
野村港二（教育イニシアティブ機構）	三河正彦（図書館情報メディア系）
古瀬一隆（システム情報系･学術情報メディアセンター）	森嶋厚行（図書館情報メディア系・知的コミュニティ基盤研究センター・平成25年度）

＜平成24・25年度プロジェクト一覧＞

プロジェクト名（担当室員）
(1) 知の集積と発信機能を強化した電子図書館システムの検討 （歳森、宇陀、逸村、福井、関川、加藤、佐藤、古瀬）
(2) 情報リテラシー教育と学生の自主的学習を促進する環境の整備 （宇陀、歳森、逸村、島田、野村）
(3) 情報探索行動の分析（逸村、宇陀、三河、森嶋）
(4) 認証システムの運用に関する実証実験（佐藤、古瀬、逸村）
(5) 附属図書館における貴重資料の保存と公開（松井、山澤）
(6) 附属図書館の将来構想の検討（関川、加藤、福井、逸村、宇陀、歳森）

各プロジェクトの成果は､『筑波大学附属図書館研究開発室年次報告』として冊子で刊行し、「つくばリポジトリ」でも公開している。

なお､本特別展は､第5プロジェクト（附属図書館における貴重資料の保存と公開）の「公開」サブプロジェクトの活動の一環という位置づけをもっている。

掲載資料一覧

資料番号	資　料　名	請求記号
1	蒙古襲来絵巻	カ 210-334/ 貴
2	林春斎自叙譜略	タ 500-90/ 貴
3	日本史要	210.1-Ki39-1・2/ 貴
4	東京高等師範学校辞令　〔鈴木虎雄文庫〕	919.6-Su96-1-128/ 貴
5	千束原追鳥狩記	キ 300-206
6	女学裁縫幼補　〔宮木文庫〕	ヘ 840- 宮 44
7	歴世女装考	ヤ 610-76
8	李蘭土氏講義 体育論	ホ 520-145/ 貴
9	***Administration and Management of Physical Education.***（野口源三郎手稿コレクション）	780.8-N93
10	農村ト報徳社　〔旧農学部教員養成関係資料〕	611.9-O79
11	無水岡田開闢法　〔旧農学部教員養成関係資料〕	614.5-O38
12	文献足徴	（図書館情報学図書館保管）
13	尚書（古文尚書）巻８　〔南摩文庫〕	ロ 815-1/ 貴
14	高等師範学校一覧	ホ 190-294
15	***Histoire de la pédagogie.***　〔福富文庫〕	B400-c9
16	寺子屋報告書　〔乙竹文庫〕	ホ 200-470
17	***Georg Wilhelm Friedrich Hegel's Leben.***　〔日高文庫〕	B130-h5/ 貴
18	論語抄　〔林文庫〕	ロ 860-1/ 貴
19	祝詞考　〔補永文庫〕	ハ 260-50
20	近江国栗本郡草津村御検地帳	ヨ 214-105/ 貴
21	支那通史　〔那珂文庫〕	ヨ 610-117
22	司法省民法編纂局 民法草案　〔穂積文庫〕	ム 850-394
23	***De l'administration des finances de la France. tome I.***	N500-n4/ 貴
24	経字正蒙 附分画便査　〔内野文庫〕	チ 530-13
25	***Geography Books. Bk.3.***　〔神保文庫〕	D'330-m3
26	***The Plays of William Shakspeare: Accurately Printed from the Text of the Corrected Copies.***　〔岡倉文庫〕	F540-s211/ 貴
27	***Paradise Lost. Bk.2,3.***〔土居文庫〕	F530-m30
28	***Histoire des mathématiques.***　〔千本文庫〕	R120-b7
29	***Essays in Science.***	S300-e10
30	化学新篇　〔明治以降教科書〕	ヘ 520-36
31	***An Outline of the Theory of Organic Evolution: With a Description of Some of the Phenomena Which It Explains.***　〔丘文庫〕	S620-m9
32	解体新書	サ 200-6/ 貴
33	千種之花	テ 800-58
34	明治 44 年山形県統計書 勧業之部　〔加藤文庫〕	ケ 400-155-1911
35	古郷帰の江戸咄	ネ 312-2/ 貴
36	秩父多摩国立公園の地質	テ 509-91
37	水府公献策　〔三宅文庫〕	ウ 000-121
38	東大寺国宝金銅八角燈籠 音声菩薩図拓本	（中央図書館保管）
39	尋常小学日本歴史 巻 1 教師用　（木代修一氏収集日本文化史関連資料）	210.8-Ki58-1・2
40	府朝事略	ヨ 275-5
41	校定大鏡	ル 130-36
42	大鏡	ル 130-88
43	読書別無法 只要耐子細	（中央図書館保管）
44	謡本 二十七番	ル 255-74/ 貴
45	修学院離宮細図・修学院御山荘御幸之儀	ア 700-19
46	廻船宝冨久呂	モ 240-4

※附属図書館の貴重図書は、請求記号の末尾に「/ 貴」と示した。

※参考資料 1・5・6・10 ～ 13 は筑波大学附属図書館、4 は筑波大学附属小学校、7・9 は個人の所蔵。2・3・8 は東京キャンパス所在。また、松井簡治・諸橋轍次・能勢朝次の肖像は『卒業記念』（東京高等師範学校、昭和 11（1936）年、個人所蔵）による。

※表紙には、資料 31・33・38・39・43、参考資料 3・6・8・9・10、松井簡治・諸橋轍次・能勢朝次肖像のほか、東京教育大学附属図書館から移管された油絵、および坪井玄道と女学生の記念写真（撮影地等未詳、筑波大学広報室提供）の画像を使用した。

企画

筑波大学附属図書館

中山　伸一（館長）

福井　幸男（副館長・研究開発室長）

加藤　信哉（副館長）

篠塚　富士男（情報管理課副課長）

附属図書館研究開発室

山澤　学（人文社会系准教授）

附属図書館特別展ワーキング・グループ

大曽根　美奈（主査）

浅野　ゆう子

大久保　明美

仲川　敦子

中原　由美子

西島　悠策

真中　篤子

山本　淳一

特別講演会「知の開拓者たち」

平成 25 年 11 月 4 日 (月)　13:30 ～ 15:30

講師　山澤　学（人文社会系准教授）

＊後日、YouTube (UnivTsukubaLibrary) でも公開する予定です。

電子展示 Web ページ

http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/exhibition/pioneer40/index.html

---

平成 25 年度　筑波大学附属図書館特別展

知の開拓者（パイオニア）たち

―筑波大学開学 40+101 周年記念特別展―

平成 25 年 10 月 21 日　　発行

発行　筑波大学附属図書館　©2013

〒 305-8577　茨城県つくば市天王台 1-1-1

TEL 029-853-2376

印刷　前田印刷株式会社